



ESD 日本ユース・コンファレンス

2014 年 2 月 16 日 (日)

参加者活動紹介

【ESD日本ユース・コンファレンス参加者 52名】

五十音順 敬称略

1・・・青木 大和	僕らの一歩が日本を変える。／代表
2・・・秋永 名美	株式会社リバネス 地域開発事業部、 東京大学大学院 サステナビリティ学教育プログラム卒業生
3・・・芦田 晃人	株式会社フェリシモ しあわせ共創部 ソーシャル共創グループ、基金事務局／事務局長
4・・・阿部 太輔	大崎市立志田小学校／教諭
5・・・天野 Faith 冬樹	NPO法人 フリー・ザ・チルドレン・ジャパン／リーダーシップ・プログラム開発部長、 モチベーション・スピーカー、パフォーマー
6・・・飯田 貴也	早稲田大学在学、こども国連環境会議推進協会、NPO法人 新宿環境活動ネット
7・・・池田 祐加子	シャープ株式会社 コーポレート統括本部 CSR推進部 企画グループ
8・・・磯野 智貴	立命館大学国際関係学部在学、大学ASPnet
9・・・井上 紘貴	岡山市京山地区ESD推進協議会／メンバー
10・・・岩崎 茜	日本科学未来館／科学コミュニケーター
11・・・岩渕 泰	岡山大学地域総合研究センター／助教
12・・・内田 裕斗	岡崎市立梅園小学校／教諭
13・・・太田 優人	名古屋大学教育学部附属高等学校在学
14・・・小笠原 舞	こども未来プロデューサー、asobi基地／代表、 合同会社 こどもみらい探求社／共同代表
15・・・奥田 麻依子	海士町役場／隠岐島前高校魅力化コーディネーター
16・・・小澤 いぶき	さいたま市こころの健康センター／児童思春期精神科医
17・・・落合 輝紀	ナーサリー富田幼稚園／園長
18・・・影浦 順子	中部大学中部高等学術研究所／研究員
19・・・勝間田 秀紀	昭和女子大学附属昭和中学高等学校／教諭
20・・・勝山 智央	福井県立若狭高等学校／教諭
21・・・加藤 大智	岡山商工会議所 企画振興部 企画課
22・・・川上 麻耶	横浜市立永田台小学校／教諭
23・・・河原 奈穂子	株式会社フェリシモ 生活雑貨調達グループ 兼 チケット事業部 兼 しあわせ共創部／ 主任
24・・・木村 芳兼	鹿角のエネルギーを考える会／代表、パタゴニアインターナショナルリンク日本支社
25・・・國本 莉花子	福山市立樹徳小学校／教諭
26・・・熊澤 ほづみ	加藤学園暁秀中学校／教諭

27・・・齋藤 史子	宮城教育大学大学院在学
28・・・佐藤 奈津子	ラムサールセンター／ボランティアスタッフ、文教大学国際学部在学
29・・・清水 純樹	大田区立大森第六中学校／教諭
30・・・田岡 洋子	愛知黎明高等学校／教諭、E S D in三重
31・・・多賀野 惇久	宮城教育大学教育学部在学
32・・・高野 寛之	福島県立福島高等学校／教諭
33・・・辰野 まどか	一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト／専務理事 兼 事務局長
34・・・田開 寛太郎	富山県立大学大学院 工学研究科 環境工学専攻 資源循環工学・環境政策学部門 博士前期課程1年
35・・・千葉 志門	NPO法人 フリースペースたまりば
36・・・戸羽 康幸	気仙沼市立階上中学校／教諭
37・・・中尾 有里	NPO法人 箕面こどもの森学園／専任スタッフ
38・・・中川 正樹	株式会社パソナ農援隊 コンサルティング事業部／マネージャー
39・・・中桐 千佳	岡山市立竹枝小学校／教諭
40・・・永田 裕寿	株式会社テクノ中部 環境調査部
41・・・非公開	
42・・・野村 佳世	養老町立高田中学校／教諭、Go4BioDiv メッセンジャー
43・・・浜口 祐子	インタープリターズ・ユニット 森あそび本舗／代表、NPO法人もりの学舎自然学校／理事 国立大学法人名古屋工業大学 コミュニティ創成教育研究センター／特任研究員
44・・・前田 遼介	非営利団体 MET-next-／代表
45・・・松浦 貴昌	NPO法人 ブラストビート／代表理事
46・・・水野 翔太	法政大学在学、名古屋わかもの会議代表
47・・・三井 俊介	NPO法人 SET／理事長
48・・・森田 淳一	岡崎市立竜南中学校／教諭
49・・・山本 千尋	岩手県立大学 看護学部 2年、岩手沿岸の中高生女子に救援物資を届ける会／代表、 ガールスカウト岩手第18団所属、ガールスカウト世界連盟国際ガールズデー・アンバサダー
50・・・横沢 里美	公益財団法人 五井平和財団／地球っ子広場担当
51・・・横字 史年	新城ユースの会
52・・・横田 創	公益財団法人 日本ユネスコ協会連盟／理事

ふりがな 氏 名	あおき やまと	都道府県	
	青木 大和		
所属/肩書	僕らの一步が日本を変える。／代表		
私の ESD活動	10代の政治意識を刺激するをモットーに掲げ、 10代と政治の架け橋となる取り組みを行っている		
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）			
私は、現在「僕らの一步が日本を変える。」という10代と政治への架け橋をモットーに掲げた団体を立ち上げ、代表をしております。2012年に立ち上げて活動をはじめ、約1年が立ちました。10代×政治という新たな領域を立ち上げ、活動することで多くの同年代などを巻き込み、これらが大手メディアなどで計50回以上取り上げられてきました。これらの私たちの活動は、大きくわけて3点あります。1点目は、「高校生100人×国会議員」という討論会です。全国から高校生100名を集め、実際に国会議事堂にて国会議員の方と1日かけて行う討論会です。実際に問題解決、問題発見を意識しながら最終的には政策提言を行うことまで行っております。この企画は、日本史上初の取り組みとして高く評価され、人脈などが一切無い中、高校生6名にて企画、立案、開催までを行いました。また偏ることなく中立的に開催し、国会議員の方には全政党から累積100名以上の国会議員の方に参加して頂きました。2点目は、「模擬選挙」です。模擬選挙とは、選挙権の無い私たち10代が実際に選挙を持ったと仮定して投票を行うことです。全国約20都市にて行い、合計1万票以上を集めることに成功しました。私たちは、既存の模擬選挙から発展させ、投票を行う過程においてiPadを導入することで多くの若者の投票を得る事ができ、過去最高の票数を集めることが出来ました。3点目は、「全国行脚」です。全国行脚は、全国を周りながら街頭に立ち、「もしあなたが内閣総理大臣になったら何がしたいですか？」という問いかけをし、それに対する思いをホワイトボードに書いてもらい、写真を撮りウェブにて配信しました。多くの若い世代の声を街頭から受け取り、ウェブに発信するというface to faceからソーシャルへ落とし込むという今までになかった取り組みを行っていきました。以上の3点が私たちが行ってきた活動です。			
・僕らの一步が日本を変える。: http://hgst-pw.tumblr.com/ ・僕らの一步が日本を変える。Facebook: https://www.facebook.com/boku1.jp			
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？			
私たち若者の強みは、2点あると考えています。1点目は、現場で足を動かしながら学び、吸収し、発信出来る事だと考えています。私たち自身、高校生100人×国会議員などのイベントの中で多くの議員さんへ自身で足を運び話をし、想いを伝え協力してもらい巻き込んできました。その結果、世代を飛び越えて熟議出来る環境を整えることが出来ました。このような環境を整え、発信出来る事が僕らの世代の強みだと考えています。2点目は、ソーシャルネットワークを駆使して、世界をまたにかけて即時に繋がる事が出来る点です。SNSの発達により活動の発信や地方との情報格差が若い世代を中心に統一化されていると感じています。どこへいても情報を手にする事が出来、取捨選択を出来る時代であるからこそ意識を同じとする仲間に出会えることも私たちの大きな強みだと考えています。 以上の2点が私たちが担う事の出来る大きな役割だと考えています。			

ふりがな 氏名	あきなが なみ	都道府県	
	秋永 名美		
所属/肩書	株式会社リバネス 地域開発事業部、 東京大学大学院サステナビリティ学教育プログラム修了生		
私の ESD活動	科学技術の持続可能な発展と社会適用のための、 課題解決型実験教室の提供		



活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）

大学院時代はサステナビリティ学教育プログラムにて、世界各国からの様々な分野の留学生と共に、エネルギー、震災復興、農業など幅広いテーマにおいて研究・ディスカッションを重ね、タイ等で行われる短期集中プログラムの開発にも携わりました。学部では純粋理学の実験系(物理学)にいたことから、科学技術がいかに社会に貢献できるかという強い疑問を持っています。今春、株式会社リバネスに入社。12 年前に理工系の院生が立ち上げた弊社では、「科学技術の発展と地球貢献を実現する」という理念のもと、ありとあらゆるテーマの科学実験教室を行い、その対象は小中高大学生から教員・社会人にまで多岐に渡ります。

現在、サステナビリティ学を修めた者として私が最も力を入れて開発しているのは、企業や学習塾との連携のもと、遺伝子組み換えや再生可能エネルギー等を扱う先端科学実験に加え、その“科学技術と社会とのつながり”についてディスカッションさせる課題解決型プログラムです。

革新的な理由は 3 点あり、まず必ず実験を体験させること。そのうえで、そうした科学技術が社会に応用される際に、どのような課題を解決しステークホルダーと合意形成をしなければならないか、ディスカッションをさせることです。2 点目は、自身の大学院での多様な研究者とのディスカッション経験を基盤に、それを初等・中等教育に落とし込み、多角的な視野をより若年層に与えていること。具体的には、まず中学生を対象とし、学年や性別に関わらず議論をさせています。3 点目は、アカデミアだけではなくビジネスとしてこの活動を行っていることです。つまり、短期的な助成金頼りでもボランティアでもなく、企業に対して人材育成や新規事業創出の一貫で実験教室のノウハウを移転しているため、それによりいただく対価は活動の横展開、新規プログラム開発に活用され、この教育活動そのものが持続可能となっています。

・株式会社リバネス: <http://lne.st/>

・河合塾未来研究プログラム: <http://www.kawai-juku.ac.jp/event/e-detail.php?eventNum=0000027714>

今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？

今後の日本社会では、文系や理系など偏らずに、誰もが科学技術の仕組みを理解し、社会とのつながりを議論できるようにならなければなりません。若者は、異なる分野、世代、国家間の橋渡しの役割を担う必要があります。

これは、私自身が純粋理学と社会科学の両方の経験を持ち、そして世界各国の研究者とディスカッションを重ねたがゆえに感じることです。社会の問題を解決し貢献する形で科学技術が発展していくべきです。科学技術に携わるものはその成り立ちを市民にわかりやすく伝える責任があり、そして科学技術の恩恵にあずかる市民は誰も、日々の暮らしを支える科学技術の仕組みを理解しようとする責任があると考えます。何か破綻が起きてから問題を解決するのではなく、長期的な視野をもって、その科学技術の導入・実用化の際に生じるステークホルダーとの衝突・合意形成までできる人材を育てなくてはなりません。

ふりがな 氏 名	あしだ あきと	都 道 府 県	兵庫県	
	芦田 晃人			
所属/肩書	株式会社フェリシモ しあわせ共創部 ソーシャル共創グループ、基金事務局／事務局長			
私の ESD活動	「ダイバーシティ社会の実現」 ものづくりを通じた障害者福祉の在り方を変える活動			

活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）

【活動の概要】

現在所属する企業の事業活動の一つである、障害者の社会参画を促進するプロジェクト、CCP(チャレンジド・クリエイティブ・プロジェクト)に 2011 年より参加しています。CCPとは、障害をもつ人を神様から挑戦というチャンスを与えられた「チャレンジド」と呼び、彼らが社会で活躍する舞台を増やすために 2003 年にスタートしたプロジェクトです。誰もが社会参画できるユニバーサル社会を目指して、全国の自治体などの協力のもと、授産施設や福祉施設、小規模作業所などのアトリエとフェリシモのプランナー、協力メーカーやアーティスト、デザイナーなどがコラボレーションし、手仕事を軸にした商品開発、販売を行っています。成果としては、約 40 の福祉施設との協働、約 200 点以上もの商品開発を行ってきました。社会的評価として、2006 年に「ソーシャル・ビジネス・アワード」、2011 年に「ひょうごユニバーサル社会づくり賞」を受賞しています。

【独創性、革新性、成果について】

福祉施設の手作り商品は、市場のニーズにあわせて作るのが難しく、生産量や販路も限られています。そこにフェリシモのマーケティング力や企画力をいかして商品開発を行い、生産を複数の福祉施設に担当いただくことで生産量を確保しながら、カタログやネットで販売するモデルを構築。ともに win-win の関係を築いています。プロジェクト開始直後から取り引きのある兵庫県のある福祉施設では、年間売上のうち3割をフェリシモの商品が占め、障害者の平均賃金は全国平均の約 1 万 3500 円を上回る約 1 万 7000 円となり、ボーナスの支給も行われています。障害者の方のもつ個性を引き出しながら、そこから生まれるストーリーを付加価値とし、販売展開していくビジネスモデルが 10 年をかけて確立されています。

・CCP(チャレンジド・クリエイティブ・プロジェクト): <http://www.felissimo.co.jp/s/ccp/>

・フェリシモ CSR 活動: <http://www.felissimo.co.jp/company/cfm/001.cfm?HL=31849&ID=31850,223&P=CSR>

今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？

「多くの活動を有機的につなげ、ダイナミックな流れをつくる“架け橋”としての役割」

現在、企業としてさまざまな社会的事業を行っています。(オーガニックコットン、フェアトレード事業、動物愛護活動)。社会では企業だけでなく、NPO・NGO、国際機関等、さまざまなアプローチがあります。しかし、そのどの活動をとってもフォーカスしている社会問題が同一であるにもかかわらず、協働といった視点がまだまだ少ない気がします。一企業ができること、一 NPO ができること、一国ができること、そんな個別視点を越えて、みんながつながればより広がりのある活動が期待できます。今そんな取り組みを企業として行いはじめています。社会問題の解決には、一つの目標に向かって種々の活動が有機的につながること、そのための“架け橋”となる取り組みや存在が必要です。その役割を次代を担う若者だからこそ担っていくことができるのではないのでしょうか。

ふりがな 氏 名	あ べ だいすけ	都 道 府 県	宮城県	
	阿部 太輔			
所属/肩書	大崎市立志田小学校／教諭			
私の ESD活動	①命を守ること ～東日本大震災の教訓を生かして～ ②自分の街の素晴らしさ、発見 ～地元企業の環境への取り組みに触れて～			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
① 前勤務校で私が身をもって体験した東日本大震災のことを、現在の勤務校でも折に触れて話している。 あの日、低学年児童が下校した直後に起きた地震。私が児童たちを追いかけたとき、彼らは下校グループの友達と肩を寄せ合い、頭を守りながらしゃがんで大人が来るのを待っていた。その後、校舎1階天井まで津波が押し寄せたため、全員が校舎 3 階の教室に入り、カーテンにくるまって互いを励ましあいながら一晩を過ごした。翌朝、飲み物だけが届き、1本のジュースを3人で分けあって喉の渇きを潤した。8割以上の児童の家が全壊したので、衣服や文房具などは全て流され、何もない児童がほとんどだった。その状況の中だからこそ、文房具や生活必需品を受け取るとき児童はとても嬉しそうだったし、支援してくれた人々への感謝の気持ちを忘れずにそれらの支援物資を使用していた。 また、防災面では、何が最も安全なマニュアルなのかが分からなくなった。体育館の 2 階に備えていた防災備品は取り出すことすらできなかつたし、保護者に児童を引き渡したのは良かったが、その後の安否がわからなくなったという現実直面した。 現在の勤務校で児童に当時の話をし、命を守ること、物のありがたさ、物を大切にするということはどういうことかを考えさせたり、防災訓練に真剣に取り組ませたりしている。 ② 再生可能エネルギーを利用している市内の企業に見学に行き、児童は太陽光発電や廃油の再利用などの具体的な様子を知ることができた。この再生可能エネルギーへの転換で温室効果ガスの排出を減らしたり、廃油をバイオディーゼル燃料として活用したりすることが環境の保全につながるということを学んだ。また、自分たちの身近にそのような企業があることにも気づき、大崎市の良さを再認識し、地元を愛する心を育むこともできた。				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？				
若い私たちが諸先輩方より多くもっているものは、時間である。時間があるということは、児童生徒と関わる時間や児童生徒が成長していく様子を見とる時間、私たち自身が“地球”と向き合っていく時間が長いことでもある。 よって、次の世代を担う児童生徒が今後どのように成長し、どのような社会の担い手になるかについて、これまで以上に、環境、国際問題、人権、防災などに目を向けて指導する必要があると考える。 私たちは、そのような児童生徒のために、少しずつでも知識とESDの意義、これから果たしていくべき役割を伝えつないでいく必要がある。そしてこれらは単発で終わるのではなく、継続的に、さまざまな教科・領域において身近な地域から地球規模にまで視野を広げて指導していくことが大切であると考えている。				

ふりがな 氏名	あまの ふえいす ふゆき	都道府県	東京	
	天野 Faith 冬樹			
所属/肩書	特定非営利活動法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパン／ リーダーシップ・プログラム開発部長、 モチベーション・スピーカー、パフォーマー			
私の ESD活動	若者が自ら進んでアクションを起こし、維持できる変化を世界中に作り上げるためのエンパワメント提供			

活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）

私は特定非営利活動法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパンのスタッフとして、学校やイベントなどで講演会やワークショップを行っています。国際協力や社会問題の講演会と聞くと、「年寄り」、「つまらない」という先入観が持たれたりしますが、私はモチベーション・スピーカーとして、興味を持ってもらうために、「楽しく」、そして、「分かりやすく」世界の状況や、「若者だからこそ出来る事」を提供しています。講演会もスライドや動画を使うだけではなく、ラップを通して世界の現状を伝えたり、ギターを弾きながら英語で若者に出来る事を歌ったりして、「ラップで世界の問題を聞いたのは初めてで、とても興味を持ちました」、「英語は嫌いだったけど、英語の歌詞を聞いて、もっと勉強したいと思いました」といった感想も頂いています。

また、世界の状況を知らせる講演会は多々ありますが、当団体では、「アクションを起こす事」をゴールとしているのと、「意見や気持ちの共有」を重要視しているので、講演会／ワークショップでは、「教える」よりも、「考えてもらい、意見を聞きだすこと」をファシリテーターとして行い、「若者だからこそ出来る事」をそれぞれの参加者が、「私が個人的に好きな事／得意な事」を使いながら、「具体的」に起こせるアクションを見つけるまでをサポートしています。

国際問題や社会問題などに取り組んだり、自分自身の見つめ直しやチーム・ビルディングを行ったりする事により、参加者の論理的思考力も伸び、学力もとても伸びています。また、「今までは何のために生きているのかわからなかった」、「人生の目的がわからなかった」と言っていた参加者も、「自分に出来る事がわかりました！」と、生き生きと世界に変化を作り続けています。参加者は、「自分から意見を言い、相手の意見も聞きだし、自己中心的な考えを止め、協力して世界を変える」という活動をするようになっていきます。

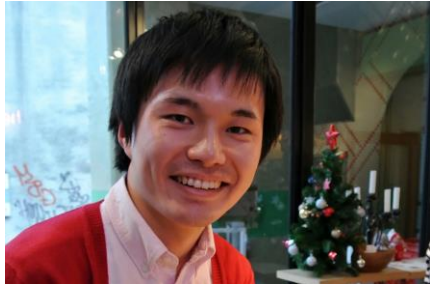
・特定非営利活動法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパン: www.ftcj.com

・Free The Children: www.freethechildren.com

今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？

若者は「未来のリーダー」という人はいますが、若者は「今」のリーダーになりえます。若者は「世界を変えるのに若すぎる」という事は無い事を信じ、他人と比べて「私には無理」という考えを止め、自分が得意な事を楽しみながら世界を変えられるという事を知り、小さなアクションを大勢で行うべきです。なぜなら、小さなアクションは行うことも継続する事も、大きなアクションより簡単だからです。

そしてそれを可能にするためには、「調べる」こと、「知る」こと、「伝える」事が必要です。若者が若者特有の勢いと元気を使い、仲間と一緒に楽しみながら以上の三つを行う事によって、世界に維持できる変化が生まれます。

ふりがな 氏 名	いいだ たかや	都 道 府 県	東京都	
	飯田 貴也			
所属/肩書	早稲田大学在学、こども国連環境会議推進協会、 NPO 法人新宿環境活動ネット			
私の ESD活動	こども向けのESD活動を、事業者・行政・ NPO/NGO・市民グループ・学生等と協働で推進 しています			

活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）

『こども国連環境会議推進協会』

国際連合大学の環境教育を機軸としたプログラムを実践する NGO です。私は事務局サポーターとして、中高生を対象としたESDとリーダー教育に取り組んできました。具体的には、持続可能な社会づくりに向けた先進的な取り組みをしている企業・研究機関・大使館等との協働ワークショップを通じて、ユース世代が将来の社会と自分自身との関係を見つめ、世界が置かれた状況を学びながら課題解決力を身に付けることを目指しています。2000年の発足から、20以上の宿泊型ワークショップ等を実施し、各80名程度の参加者を迎えてきました。近年、課外活動としての環境ワークショップが各方面で増えてきていますが、環境問題は「持続可能性」の一面であるのに対し、“地球にやさしい”というエコロジーの観点に傾倒しがちであるように感じます。当団体は「持続可能性」を大きなテーマに掲げ、環境・経済・社会・文化といった幅広い視座から社会問題の解決を狙っている点、周囲を巻き込むためのコミュニケーション・プレゼンテーションセミナー等、能力開発をはじめとしたリーダー教育を併せて実施している点が特徴です。

『新宿環境活動ネット』

2004年から『エコギャラリー新宿』を指定管理者として運営する NPO です。とりわけ、私は『まちの先生見本市』というイベントの事務局スタッフとして、区民・事業者・行政が連携した、小中学生が対象の ESD 推進活動に携わっています。地域の人材やプログラムを集め、学校の先生方に活用を促すことで、教育現場の ESD を地域で応援するシステム構築を目指しています。年に一度の当イベントは、2013年度で13回目を迎え、例年約50団体が出展し、各1,500名程度の来場者を数えます。さらに、これがきっかけとなって年間100ほどの出前授業が誕生しており、“立場と分野”を越えた地域発の活動である点が特徴です。

・こども国連環境会議推進協会：<http://junec.gr.jp/>

・NPO 法人新宿環境活動ネット：<http://www.sean.jp/>

今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？

「持続可能性」という言葉が世に送り出されてから30年が経とうとしていますが、この課題が解決されていないばかりか、社会の諸問題と比べて、認知度・浸透度が低いように感じます。抽象的で明快なイメージが湧きにくい概念であることは否めませんが、それでも社会へ広げていくべき、大切なキーワードであることに変わりはありません。そのためには、若者が旗振り役を担っていくことが求められるのではないのでしょうか。

また、「持続可能性」という概念やその重要性が十分に認識されていない現代社会においては、これに関する取り組みへの賛同も得られにくい状況です。このような逆風の中でも ESD を発展させていくためには、知識やデータといった専門知が不可欠であることはもちろん、ESD 推進者である私たち自身が“あの人の提案することならやってみよう”と周囲を納得させ、巻き込み、実行していくための人間力を磨くことが必要になるように思います。

ふりがな 氏 名	いけだ ゆかこ 池田 祐加子	都道府県	大阪府	
所属/肩書	シャープ株式会社 コーポレート統括本部 CSR 推進部 企画グループ			
私の ESD活動	持続可能な社会の構築に向けた、企業による教育 支援活動「小学校環境教育」の企画、運営 (2010年5月～現在)			

活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）

持続可能な社会の構築に向けた、企業(シャープ株式会社)による教育支援活動「小学校環境教育」の企画、運営（カリキュラムの開発、実施校の募集活動、実施日程調整、社員講師の研修育成等）を行っています。(2010年5月～現在)

「小学校環境教育」は社員講師が地域の小学校に出向き、次代を担う子ども達に対し、地球温暖化防止の問題、リサイクルや新エネルギーの学習を行う総合的な環境授業です。

独創性、革新性としては、

- 1). 太陽光発電の実験や家電リサイクル工場の映像等、企業のリソースを活かしたカリキュラムで、講義やクイズ、実験を交え、児童との交流を深めながら、楽しく環境について学べるようになっている点。
- 2). 学習指導要領に沿った内容の講義や実験をすることで、学校側が総合的な学習の時間等の授業の中で活用し易いものとしている点。
- 3). 日本のみならず海外拠点にも現地に合わせたカリキュラムで展開している点。 が挙げられます。

成果として、2010年度～2013年9月末において、国内、海外合わせて累計1,774校(約99,790人)へ実施しました。また、授業後、学校にアンケートへご協力を頂いており、先生方からは、

- ・地球温暖化やエネルギー等の難しい話を身近な問題として受け止め、日常の環境に配慮した行動に繋がった。
- ・環境学習はどうしても座学だけになりがちだが、実験や体験活動で、子供たちが参加できる工夫が良い。

等の声をお寄せ頂き、高い評価を頂いています。

また、児童からは、年間約3,000通の感想文が寄せられており、その中には

- ・環境技術者になって地球を救いたい。
- ・手回し発電をして、電気を作ることの大変さがわかった。これからは地球にやさしい行動をしたい。
- ・実験で楽しみながら二酸化炭素の性質や太陽電池のことがよくわかった。

といった、自ら地球にやさしいライフスタイルを実践したり、環境技術に興味を抱いたりという声が多く見られます。

・シャープ 小学校環境教育のご案内: http://www.sharp.co.jp/corporate/eco/kyoiku/eco_lesson/index.html

・シャープ サステナビリティレポート2013 教育分野の取り組み:

<http://www.sharp.co.jp/corporate/eco/social/community/education/index.html>

今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？

ESD の更なる発展のために若者は、持続可能な社会づくりのためにモチベーション高く行動していることや、現代社会の課題を解決する為に行っている教育活動のアイデアや事例について世界へ発信する役割を担う事ができると考えています。

日本の若者は、環境問題や貧困、地域活性化、防災への関心が高く、特に東日本大震災後からは震災復興のみならず各種災害復興の為のボランティアへの参加も増えるなど、日本・世界を救いたい、より良くしたいという気持ちが大きいように感じます。今回のコンファレンスでそのような経験や思いを共有し合うと共に、若者が現代社会の様々な問題に関心を持ち、自分のこととして捉え、解決策を模索し、実践している姿を発信することで、世界的な ESD の認知度や関心を高め、より多くの人々が ESD について出来ることを考えるきっかけづくりが出来るのではないかと思います。

ふりがな 氏 名	いその ともたか	都 道 府 県	大阪府	
	磯野 智貴			
所属/肩書	立命館大学国際関係学部在学、大学 ASPnet			
私の ESD活動	ASPnet (ユネスコスクール) 高校生国際フォーラムの本番及び準備セミナーのサポート			

活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）

高校生の時、ユネスコスクールに通っていた私は、リトアニアでのバルト海沿岸 9 ヶ国 ASPnet 校の高校生が集まる国際会議に出席し、ESD について一緒に学びました。その後、2008 年大阪での UNESCO ASPnet アジア北欧 7 ヶ国高校生国際会議にて議長と運営を経験させて頂きました。こうした ESD との出会いは私にとって“自分が成長する・変わる”大きなものでした。このような ESD の学びを大学生になっても継続していきたい、高校生にも伝えていきたいと思い、大学に入ってから『大学 ASPnet』というユネスコスクール出身の大学生を中心とした、ESD に関しての勉強及びユネスコスクール生徒の ESD、ユネスコ活動のサポートを行なう団体で活動しています。

2014 年 11 月岡山市にて「世界ユネスコスクール大会」が開催されます。世界 34 ヶ国の ASPnet 校から高校生が集い、「持続可能な社会」について熱い議論を交わす予定です。

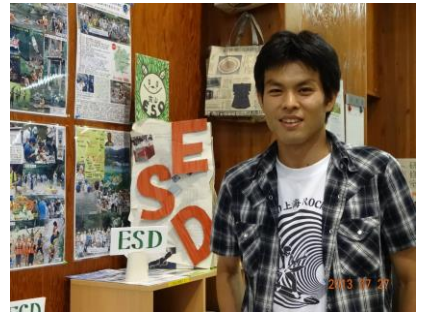
ユネスコスクール支援大学の 1 つである大阪府立大学は文部科学省とのパートナーシップ事業として、世界ユネスコスクール大会の準備・運営ができる高校生の育成を 2012 年から『ユネスコ準備セミナー』として、実施しています。大学 ASPnet では準備セミナーの立ち上げから参加させて頂き、“サポート大学生”として高校生たちをサポートさせて頂いています。私たちは一から ESD を学び、また各係(運営や撮影班、受付案内係など)にそれぞれ入り高校生たちがどのような気づきをしているのか、ESD をどう捉えて理解しているのかを分析し、サポートに活かしています。プレイベントとして 2013 年 1 月には日中韓 3 ヶ国国際会議が、11 月には 8 ヶ国国際会議が無事に成功しました。

このセミナーや国際会議を通して、体的に「ESD とは何か？」を高校生たちから学んでいます。

今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？

これまで高校生のESD活動のサポートを経験させて頂いて大きく驚いたのが、参加する高校生たちの成長の仕方です。国際会議を運営する高校生1人1人がESDを頭で理解するだけではなく、自らの行動や姿勢でそれぞれの係の中で表現していました。その様子を見て、ESDには人を大きく成長させる要素がある、きっかけがあると感じました。私自身もその一人だと思っています。

ESDを知る若者の役割として、私たちはまだ知らない若者や次の世代の人にESDのフィールドへと導く役割があると思っています。ESDという言葉や考えを知らない周りの人に伝えていく、またESDに関心のある人が身近に参加できる下地を作っていくことが重要なのではないのでしょうか？そのためには「ESDとは何か」を1人1人が深く理解する必要があると思っています。

ふりがな 氏名	いのうえ こうき	都道府県	岡山	
	井上 紘貴			
所属/肩書	岡山市京山地区 ESD 推進協議会／メンバー			
私の ESD活動	岡山市京山地区における、 公民館を核とした地域づくり			

活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）

岡山市北区京山地区では、京山公民館を核とした、ESD 活動を推進している。具体的なものの一つに 2003 年より実施している KEEP(京山地区 ESD 環境プロジェクト)がある。これは中学生を中心としながら、小学生、高校生、大学生、社会人、高齢者まで幅広い世代で地域内を流れる用水路での水質調査や生物調査、あるいは公園での大気調査、植物の観察を 1 年に 2 回、定期的に行っている、地域ぐるみでの環境学習である。

2005 年度からは、地域内に ESD をより普及、促進させるべく、京山公民館を会場に「ESD フェスティバル」を毎年 1 月に開催しているほか、2007 年からは地域の人、歴史、文化を映像で残すべく、「ムービー京山」を立ち上げたほか、2008 年度には演劇を通じて、環境問題や ESD について訴える「劇団公民館☆京山」も立ち上げてきた。

京山地区のみならず、岡山市における ESD 活動の特徴として、公民館を核としていることである。公民館は子どもからお年寄りまで集まる、地域社会の中心となる公的な場であり、公民館を活用することで幅広い世代、各種団体を巻き込むことができるというメリットがある。その結果、京山地区では環境問題をメインに ESD 活動を始めたが、活動を継続するうちに防災、子どもの居場所づくり、外国人との共生など、地域に関する様々な課題にも地域ぐるみで取り組むようになり、世代を超えた対話、学びあいの場を提供している。

京山地区が ESD に取り組んできた成果の一つとして、「緑と水の道」プロジェクトがある。これは京山地区を流れ、環境てんけんの調査地点でもある観音寺用水を対象に、子どもが安心して親水でき、なおかつ交通弱者の高齢者も安心して歩行できる空間を目指したものである。2007 年 12 月の「市長と語る会」において環境てんけんに参加していた中学生からの提案を基に、行政や大学、町内会とが協働して案の具体化を進めてきた。「緑と水の道」は現在整備が進行中で 2014 年 4 月に供用開始予定である。

・岡山市京山地区 ESD の活動: <http://www.kc-d.net/pages/esd/>

今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？

若者は環境面のみならず、経済面、社会面においても将来に対して強い不安を抱いている。しかし将来を悲観的に捉えるのではなく、「何とか自分たちでよくしていこう」と前向きに努力させるために、「稼ぐ力」や「仕事起こしの力」を彼らにつけることで、社会課題を解決しつつ、なおかつ収入も得られるようなソーシャルビジネスを促すことが期待できる。

また、いつの時代も若者はお洒落に対して非常に敏感である。若者自身がトレンドを常に把握し、お洒落なイベントを起こすことで、活動に賛同する若者が増え、地域に賑わいをもたらすことも期待できる。

若者は柔軟な発想、素直に聞き入れる能力が長けており、若いうちから ESD に即した活動、学びを継続的に提供することで、自らの価値観、行動も変えることができると思われる。また、自ら行動できる若者に活躍できるチャンスを与えることで、社会をより持続可能な方向に変える役割が期待できる。

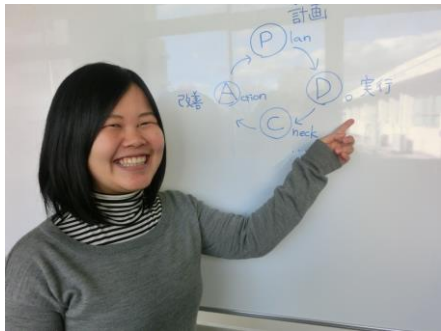
ふりがな 氏 名	いわさき あかね	都 道 府 県	東京都	
	岩崎 茜			
所属/肩書	日本科学未来館／科学コミュニケーター			
私の ESD活動	科学コミュニケーターとして環境問題に関わる 様々なプログラムの開発・実施、イベントの企 画を行う			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
科学コミュニケーターは、答えのない地球規模の課題に対して、一般の人々が多角的に考え自分の意見を構築できるよう、社会と人々をつなぐ役割を担っている。私自身は生物多様性や地球温暖化といった環境問題に関する業務に特に注力してきた。担当した主な仕事は以下の通り。 1. 生物多様性 COP11 に合わせて開かれた World Wide Views 日本大会（市民会議）におけるファシリテーター。 2. 生物多様性対話型ワークショップの開発および実施（高校生、大学生に向けて、全国規模で展開中）。 3. タイで森作りに関わる小学生を招き、日本の小学生と交流しながら環境問題を考えるワークショップの企画・実施。 4. 地球温暖化に関するデータを読み取り多角的にその解決方法を考えるワークショップのファシリテーター。 今回特に紹介したいのが、2. のワークショップである。主に高校生と大学生を対象としたこのワークショップは、生物多様性の劣化について考え、議論することを通して多様な価値観に触れ考えを深めることを目的としている。 具体的には、生物多様性の劣化を引き起こす人間の経済活動と、自然保護、未来に向けて社会がどちらに進むべきかを考えてもらう。その際、経済活動優先派と自然保護優先派の 2 派、計 6 つの立場に分かれて、ロールプレイングを通じたディスカッションを行う。自分とは違う立場や考えがあることを知り、それぞれの立場からの意見を聞きあうことで課題を多角的に考え、議論を重ねることの重要性を実感してもらう。 2013 年度に 10 以上の高校や大学でワークショップを実施してきた。実施後のアンケートからは、生物多様性という課題を多くの参加者が自分の生活と結びつけて考えを深めた様子が伺えた。また、「答えに至るのが難しい課題について話し合うことが大事」といった対話の重要性を認める意見もあった。今後も全国規模で実施を継続する予定である。				
・日本科学未来館科学コミュニケーターブログ岩崎執筆分： http://blog.miraikan.jst.go.jp/author/a-iwasaki				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？				
自分の住む地域の自然、それが育んだ風土や文化を若い世代が再評価し、「身近な環境を大切にする」ことの総体としてグローバルな ESD が発展すると考える。 環境問題はとりわけ、地球に住む私達一人ひとりが自分事として考え、解決に向けて行動しなければならない。みずからが自然と関わる態度を変え、自然に生かされているこの生活を実感し、自然を持続的に利用することを考える必要がある。また、人間の生が自然に基づく以上、自然を人間から切り離して保護しようというだけではなく、人間が手を加えながら維持していくことが欠かせない。 日本に目を転じれば、東洋の「調和的自然観」と言われるように、また里山文化にも代表されるように、自然を敬いながらも上手に利用する風土を我々は持っている。日本人がこれまで培ってきた自然との深い関係こそ、若い世代が新たな視点で再評価し、世界に発信すべき財産だと思う。				

ふりがな 氏 名	いわぶち やすし	都道府県	岡山県	
	岩淵 泰			
所属/肩書	岡山大学地域総合研究センター／助教			
私の ESD活動	まちづくり実践型教育 ー若者が地域と対話するまちー			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
ESD 活動として、日本人学生と留学生が、地域住民と信頼ある対話を通じたまちづくり実践型教育を行っている。特徴として、学生が、大学内での、講義だけではなく、学外のまちづくりに参加することで、地域の潜在的課題や生活の知恵を掘り越していくことが挙げられる。私は、「若者が地域と対話するまち」を目指して、文部科学省留学生拠点整備事業「留学生のまちづくり」、岡山大学・西川緑道公園賑い調査のプロジェクト・リーダーとして活動している。 (1) 留学生のまちづくり事業 2012 年度、産官学の地域コンソーシアムを立ち上げ、留学生の生活、学び、就職を一貫してサポートし、岡山の友好親善大使を育てるプログラムを作成した。2013 年 6 月 9 日には、日本人学生、留学生、サポーターの 100 名と共にオカヤマ・ウェルカム・ピクニックを開催した。参加者は後楽園の歴史を学んだ後、岡山城や出石町でまち歩きをし意見交換をした。 (2) 西川緑道公園賑い調査 2012 年度から、西川のまちづくりとその変遷について調査している。学生は、歴史ヒアリングやモニタリングを行い、まちづくりが持続的に展開するためのアイデアを提示している。 独創性:信頼のある対話 独創性は、大学、学生、地域が、学びの連携からまちづくりのパフォーマンスを高めることである。大学と地域の対話が、双方の発展を促し、岡山全体を学びのキャンパスに変えていくものである。 革新性:地域の持続性を明らかにする 革新性は、学生が、持続的なまちに必要なことを議論し、探究心や創造性を磨くことで、暮らしやすいまちづくりへと発展することである。その他、学生は、ESD による気づきを、環境学、経済学、工学、農学、医学などのそれぞれの専門性から分析し、地域の持続性を明らかにすることである。 成果:学びのまちづくり 成果は、学生が地域の課題や魅力を発見し、地域を持続的に運営する民主主義のトレーニングを積むことである。 ・アゴラ日記: http://www.okayama-u.ac.jp/user/agora/index.html ・歩きたくなる西川などの執筆: http://www.okayama-u.ac.jp/user/agora/publicity/index.html				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？				
若者は、日本から世界へ学びのまちづくりを繋げていく役割がある。これから ESD を発展させるには、多様性の中で個性を磨いていく市民教育が必要である。何故ならば、変化の激しいグローバル社会の中で、多様性は豊かな社会の基盤となるが、市民は、様々な意見や利害のバランスを取りながら、しっかりとした個を持たなければならないからである。 その中で、若者は、個性を深めながらも、地域への窓も閉ざされていない市民性を持ち、グローバルな連帯を深めていく必要がある。続けて、若者は、持続性を感じるだけではなく、その持続性を磨き、自分の意見として表現することが必要となる。ESD の本質は、既存の教育カリキュラムによる専門的知識の伝達では届きにくい教育を担っていることである。それは、倫理、感性、創造性など共生社会を志向するヒューマニズムである。若者による ESD の貢献とは、暮らしの中で学び続ける姿勢を持つことと言える。				

ふりがな 氏 名	うちだ ゆうと 内田 裕斗	都道府県	愛知県	
所属/肩書	岡崎市立梅園小学校／教諭			
私の ESD活動	学校教育において、ESD を意識した授業実践 に日々取り組んでいる			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
愛知県岡崎市の中心部にあり、一昨年度開校 140 周年を迎えた岡崎市立梅園小学校。本校では、「岡崎市環境学習プログラム」をもとに、地域や子どもたちの実態に合わせた環境学習の実践に取り組んできた。「世界的な視野をもつ子に育てほしい」「他校との交流を通して、子どもの学びを深めたい」という願いから、ユネスコスクール加盟に向けて動き始め、昨年 7 月加盟が決定した。 昨年度、5 年生を担当した。本学級では、総合的な学習の時間「伊賀川のホタルを未来へつなげよう」で、<u>環境維持の意識を高め、主体的に地域へ動きだし、「つながり」を尊重できる子どもの育成</u>を研究主題に立てた授業研究を行ってきた。子どもたちの中に育ち始めた「自分たちの手で、よりよい梅園学区にするために動き出そう」という意識を生かし、さらに ESD を実践していくうえで心がけたい様々な事象との「つながり」を尊重する価値観を、内面から確実に育て、主体的に地域に動き出す子どもに育てていきたいと考えた。授業の実践に当たっては、3 つの仮説と具体的な手だてを立てた。 実践を通して、子どもたちは何度も調査活動に出かけることで<u>学区を流れる川に愛着を持ち、地域の方とともに「ホタルも人も住みやすい環境を作りたい」</u>という気持ちが高まった。学習のまとめとして、地域や他学年の児童に取り組みを伝える発表会を行った。「伊賀川のごみを減らしていきましょう」児童は、<u>地域の方と共に行動していきたい</u>と呼びかけた。 以上のような成果だけでなく、子どもの変化を継続して見つめていく中で、教師である自分自身が、様々な事象との「つながり」を尊重していく重要性に気づくことができた。 今年度は、児童会が中心となり全校児童で「今私たちにできることプロジェクト」に取り組んでいる。被災地、特に宮城県石巻市押切沼田地の方々との交流活動を通して、震災の記憶を忘れない、人を思いやる優しい心を育てる実践を行っている。				
・岡崎市立梅園小学校: http://www.oklab.ed.jp/weblog/umezono/ ・ユネスコスクール加盟校情報: http://www.unesco-school.jp/index.php?key=mut8w9z1y-18#_18				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？				
一昨年度から本校のユネスコスクール担当を任せられ、様々な研修会に参加した。昨年行われたユネスコスクール全国大会では、環境学習に取り組む先進校の実践を聞き、「すぐに授業で生かしてみたい」と思える取組に出会えた。8 月に東京で行われた教員研修会では、日本ユネスコ協会連盟寺尾先生の講演会で「福島原発のように答えのない問題が多い今日。この答えのない問題を解決しようとする子どもを育てなければならない。持続可能な社会に挑戦できるのは、教育しかない。」という言葉が、心にすんと落ちた。めまぐるしく日々変化する 21 世紀を生きる子どもたちに、教育において ESD のアプローチをすることが重要であると強く感じた。 日本の若者として、まだまだ経験の浅い中でも未来を担う子どもたちを育てる教育者として「ESD とは一体何か」という答えを模索しながら、日々の授業実践の中で試行錯誤しながら取り組んでいる。このことを、世界に発信したい。				

ふりがな 氏 名	おおた ゆうと	都 道 府 県	愛知県	
	太田 優人			
所属/肩書	名古屋大学教育学部附属高等学校在学			
私の ESD活動	【Youth as Change Agents】多様な概念を包括する “sustainable society” 実現のため、ユース世代に よる「分野横断的 ESD」を推進してきました			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
地域のソーシャルキャピタル創出を目的に、愛知県中から50名以上の高校生を集め選挙権啓発企画を実施。さらに高校生による「政策争点投票」型の模擬選挙を実施し、900票以上の10代の声を集めた。 バングラデシュを訪れ、JICAや11もの現地NGOで貧困削減・環境保護活動を見学。またProthom Surjoという団体と協力しラムで英語教育を行ったり、ノーベル平和賞受賞者のユヌス氏と特別に面会したりした。 広島で国際平和と核問題に関する外国人への聞き取り調査を実施。その後90名もの中高生やドイツ・韓国からの留学生を集め、ハーバード大サンデル教授の授業を基に国際平和に関する熟議型イベントを実施した。 日本のユネスコスクール代表団として UNESCO 本部を訪れ、ESD 担当職員へのプレゼンや、ボコバ事務局長との意見交換を行った。またドイツの ESD モデル校を訪れ、環境保護活動を視察した。 名古屋大学法政教育研究センターの協力でモンゴルの高校生と定期的に TV 会議を開催。経済発展の最中にあるモンゴルの高校生と環境問題・文化保護について議論を深めた。また前駐モンゴル大使城所卓雄氏に來校して頂き途上国の開発に関する勉強会を開催した。 伝統芸能「棒の手」や郷土祭の若き担い手として活動。また高齢者への聞き取り調査や名古屋市誌等を通して郷土史の研究を進めた。そして学んだ伝統文化を世界に発信するべく、世界11カ国からのホームステイ受け入れを行った。 「地球子ども会議」のメンバーに選ばれ中国を訪問。南京の高校生と国際平和や環境問題に関する会議を開いたり、上海万博で日本側代表として平和構築に向けたスピーチを行ったりした。 アジア14か国から選抜された若者が集う「アジアユース人材育成プログラム」に参加。各分野の専門家による講演とディスカッションを通して、3週間にわたり貧困問題や環境問題を学んだ。また開催地沖縄の民家に宿泊して伝統芸能を体験したり、環境保護活動を実施したりした。				
・朝日新聞デジタル掲載記事：http://www.asahi.com/edu/articles/NGY201304180009.html ・ユネスコスクール加盟校高校生スタディーツアー：http://www.unesco.or.jp/unesco/news/2012/3741217044404.html				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？				
【地域文化から地球文化へ】・・・地域の伝統文化に根付く世代間倫理や自然との相互依存精神は、ESDの発展に欠かせない要素だ。そこで若者が、こうした前近代の地域文化を現代の地球文化として発展的に継承するべきだ。この役割については SATOYAMA イニシアチブや世界寺子屋運動などの成功例があり、私も外国人と共に行う祭や世界各国で伝統文化を広める企画等を進めてきた。さらに今後若者がこうした役割を担うことで、高齢者と若者の連携促進や文化衰退の防止も実現できるのだ。 【国際協調の先例を】・・・アジア各国の友達と米軍基地の横を通りすぎた時のこと、友達の母国に刃を向けているその基地の存在は、国という枠を越えて絆を深めてきた私たちにとって負担にしか見えなかった。そこで私は、既存の対立関係を乗り越えて国際協調の先例を示す事こそが若者の役割だと感じた。世界中の若者たちと共に考え、話し合い、行動を起こしてきた私は、若者にはそれが可能だと確信している。				

ふりがな 氏 名	おがさわら まい 小笠原 舞	都道府県	
所属/肩書	こども未来プロデューサー、asobi 基地／代表 (NPO 申請中)、 合同会社こどもみらい探求社／共同代表		
私の ESD活動	親への子育て体験型教育の場の提供および大人もこどもも自分らしくいられる子育てコミュニティづくり		
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）			
18 歳から子どもに関わるボランティアを初め、一般企業に就職後、2010 年から保育士として勤務。現場にいて見えてきたことは、こんなにも個性ある子ども達が、果たしてこのままの教育の仕組みで、自分らしく生きていけるのかという疑問でした。その問題を解決するために、現場のニーズを見て、仮説を立てました。それは、”子どもには「子ども達が自由に自分を表現できる、自分らしくいれる場所、自分を知ることのできる場所を増やすこと」が必要。大人（親以外にもプレ親等の大人も含む）には「子どもを知れる場所、子どもとの関わり方について学べる場所、大人も自分らしくいれる場所」が必要”ということです。それを具体的にするために、2012 年 7 月から新しい子育て支援コミュニティ asobi 基地（現在 NPO 申請中）を始め、現在までに 30 回をこえるイベントを実施し、2000 組以上の親子や大人と出会いました。保育士、こども精神科医等の専門家もいるため、子どもと一緒に見ながら気軽に育児相談できたり、子どもの特徴を教えてもらえたりもするので、1 度来たらリピーターになることが多く、大人も子どももそれぞれが、楽しめる・学べる場所として機能してきました。 簡単に言うと、こどもをつれて実践型で子育てを学ぶ場所です。さらに、保育士が多くスタッフに集まってきたので、保育園を超えて社会に新しい保育士の役割を見だし、子どもを取り巻く問題を解決していくため、保育士たちの保育園以外の活躍の場としても機能してきました。常に現場を感じて、アクションし、課題を見つけ、さらにアクションをと動き続けることで、変化をしつづけながら、今の子育ての現場に必要なことをつめこんで、表現しています。親の子育ての学びの場づくりとコミュニティによる継続的な支援をすることで、こどもたちが安定し、様々なことにチャレンジできるこどもたちを育てて行き、日本の未来をつくる人材の育成につなげていきます。			
・asobi 基地: http://asobikichi.jp/ ・asobi 基地 Facebook: https://www.facebook.com/asobikichi			
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？			
今までの概念、当たり前という考えではなく、課題を解決するために現場のニーズをくみとり、新しいアイデアでの社会課題解決をしていくことができると考えています。 私自身で言うと、自分の実体験（こどもたちに自分の人生を変えてもらった）から「子どもの持つ力と可能性について」を発信すること。こどもたちには人を変える力があり、さらには社会を変える力があると信じています。社会的に弱者になりやすい子ども達ですが、私はその力によって今、ここに生きているので、彼らの声を社会・世界に代弁し、彼らの立場・視点を取り入れながら、世界をよりよく変えていきたいと思っています。「こどもの人権について」「これからの日本における家族観、こども観について」「保育士という仕事の可能性」など、今までの歴史の流れではなく、今の課題・現状から新しいやり方でのイノベーションを与えていけると思います。			

ふりがな 氏 名	おくだ まいこ 奥田 麻依子	都道府県	島根県	
所属/肩書	海士町役場／隠岐島前高校魅力化コーディネーター			
私の ESD活動	離島の高校で「地域の文化を継承し、未来をつくる人財の育成」を目標に、地域資源を活かした教育を推進			

活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）
持続可能な社会づくりを教育から進めるモデルをつくるべく、「島前高校魅力化プロジェクト」に携わっている。本校は地域内唯一の高校であり、その存続は地域の存続と直結する。また、地域の存続には「地域の未来をつくる人材の育成」が必要不可欠である。その育成を学校の中だけでなく、行政・地域住民等、多様な主体を巻き込み、地域総がかりの体制で進めている点が本活動の特徴であり、平成 23 年度には「キャリア教育推進連携表彰（文部科学省・経済産業省主催）」の優秀賞、平成 25 年度には「第 1 回プラチナ大賞」の大賞・総務大臣賞を受賞している。
活動①「地域学」「地域地球学」…「地域創造コース」で開講している授業で、地域の方も講師として招きながら、地域の課題を学んだ後、関心を持ったテーマについて、少人数のチームでの課題解決策を提案・実践する。「地域地球学」では、世界で起こっている問題と地域での課題とのつながりも学ぶことで、グローバルな視点を持った上で地域での実践を行えるようカリキュラムを組んでいる。また、これと並行して、活動の際に必要なスキル（対話、多文化協働等）を学ぶ授業も行っている。授業を通して地域社会に対して自分も何かできるという実感を得た生徒の中には、進学先の留学制度を活用し、欧州でコミュニティビジネスの事例を学びながら、隠岐の PR を行うなど、世界と地域をつなぐ活動を行う生徒も出始めた。
活動②「ヒトツナギ」…島の魅力的な‘人’、その営みを観光資源と捉えた観光プランである。島探検やホームステイを通して島の人と交流し、島の生活に触れる 4 泊 5 日の旅を高校生主体で実施している。これからの地域社会に重要な「つながり」の価値を高校生が再認識し、それを他の人に伝えていくという点でも意義のある活動である。この企画を通して、島の魅力を感じた島外の中学生在が「島留学」生として高校に入学し、運営側として関わるケースも出てきている。
・島根県立隠岐島前高等学校： http://www.dozen.ed.jp （地域創造コースカリキュラム、ヒトツナギ等） ・島前高校魅力化プロジェクト： http://miriyokuka.dozen.ed.jp/ （プロジェクトの背景、取り組み概要等）
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？
日本は多くの課題に直面しており、隠岐は、その日本の中でも僻地と言われる離島で「課題先進地域」である。しかしながら、関係者が危機感とビジョンを共有し、連携しながら様々な取り組みを続けることで、それが少しずつ形になってきた。そして、最近はそのような大人達の背中を見て育った高校生が「自分達も何かしたい」と行動し始め、その取り組みがまた地域に活力を与えるという好循環が生まれてきている。
課題と向き合いながら育ち、多様な価値観を受け入れやすい若者だからこそ、ESD の担い手の中心となり、これから育つ若い世代だけでなく、これまでの社会を背負ってきた上の世代とも協働しながら、新たな取り組みを行って行けるのではないかと考える。さらに、それぞれが個別に活動するにとどまらず、志を同じくする者同士がつながることで、学びのネットワークができ、連携や協働が進み、社会的にも大きなうねりをつくっていくことができるのではないかと考える。

ふりがな 氏 名	おざわ いぶき 小澤 いぶき	都 道 府 県	
所属/肩書	さいたま市こころの健康センター／ 児童思春期精神科医		
私の ESD活動	育ち・学びの中で多様性を体験し、共存しながら 生活する、社会に新たな価値観を創りだすコミュ ニティ作り		
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）			
児童精神科医としての経験の中で、社会参加する以前に安全な育ちの場や学びが保障されていない子供が少なくないこと、そのような子供達が本来持っているレジリエンスや育つ力を発揮できる環境も少ないことを感じた。 また、東日本大震災により既存のコミュニティが崩れ、虐待やDVが増加し、大切な安心基地がなくなっている状況に対しても、このような視点でも考えていく必要があると感じている。 これまでに地域や医療機関や行政機関と共に、 ① 上記のような子供達の居場所や学びの場作り ② 親及び子供達に関わる周囲の大人たちへの啓蒙・ネットワーク形成 ③ 子供達が自らの将来を自主的に選択して行ける環境作り を主に行ってきた。 さらに、子供達が生きていることを承認されながら、自分の生き方、在り方を主体的に選んでいける仕組みを作るために、 ・子供達の成長過程に多様な育ち、学びを生み出す ・多様な育ちや学びのエコシステムが地域にあり、その多様さが当たり前を受け入れられる価値観がある ことが必要だと考え「多様性と共存しながら育ち学ぶ家族機能補完型生活コミュニティ」創りに取り組んでいる。 多様なバックグラウンドを持つ個人、家庭が暮らす新しいコミュニティで、ファミリーホーム、ドロップインハウス（家にいることが難しくても安心して泊まることのできる機能を有する家）、食事や会話・学びを共有出来るスペースを有し、誰もが承認され、社会と自分を繋げていけるという価値観を大切にする。 独創性・革新性：このような社会層で分断されない生活の場がこれまで日本にはなかった点、多様な家族、育ち、学びの在り方といった既存の価値観だけに捉われない点などが挙げられる。 成果：南三陸においての子ども達の第二の育ちと学びの場づくり、及び新しい教育の形の在り方づくり。東京においてコハウジングのモデルを考案し、部分的なプロトタイプを行いながら継続的に行える場所を見付け交渉中である。			
現在準備中			
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？			
多様な価値観を知り、それと共に在る在り方の身近なモデルとなる。またそれが経験できるコミュニティ創りを地域と共に行う。このようなコミュニティで過ごした子供達が、世界の中で多様なエコシステムを創りだす実践者となるというサステナビリティがうまれる。 若者は子供達の身近なモデルとなり得、共に様々なことを体験しながら、価値観の多様さを肌で感じる経験を作り出す。子供達も、普遍的で評価のない、誰もが体験できる遊びを入口とし、その興味の先にある学びも体験しながら、大人と共に多様な在り方を楽しみながら知り、他者との関係の中で自己を知っていく。このような体験の中で自分の知らない価値観や多様な在り方を学んでいく。 また、地域からみえる課題を世界の中の地域という視点で対話していく中で、子供達に、世の中には様々な人がいて、様々な価値観があることを感じていく場を創りながら、子供達が自分達で考えていく経験をうみだす。			

ふりがな 氏 名	おちあい てるき	都道府県	徳島県	
	落合 輝紀			
所属/肩書	ナーサリー富田幼児園／園長			
私の ESD活動	こども新聞製作・異文化交流・芸術文化交流 絵本の読み聞かせ			

活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）

『こども新聞製作』

取材記事ページと、新聞記事のコラージュページで構成されたこども新聞を毎月発行しています。

▽幼児が話し合いで取材先を決めます。タブレット端末で連絡先を調べ、電話で取材のお願いをします。

▽切り抜き記事で疑問点があれば、電話で問い合わせます。

▽コラージュページでは、なぜその記事を貼ったのかについて、コメントを書きます。

▽大きく取り上げたい内容については、特集ページを作ります。これまでに、マラウさん銃撃事件、フィリピン台風、イスラム文化、ゆるキャラなどを特集しました。

▽新聞で大きく取り上げられている内容について話し合います。フィリピン台風については、話し合いと情報収集によって募金活動にたどり着くまでに取り組みが深まりました。

※国内で幼児の新聞製作の実践記録がないので、取り組みを英文にして海外で実践共有をする準備をしています。

『異文化交流』

ペンパルフレンド（アメリカ）との文通交流と、海外文化を学ぶ特別授業を行っています。

『芸術文化交流』

芸術家を招いてワークショップなどを開催します。

『絵本の読み聞かせ』

屋外で不特定多数のこどもに絵本の読み聞かせを行っています。

▽9時～15時までの間、マルシェ（市場）を訪れた親子を対象とし、本棚からこどもが選んだ絵本を読みます。

▽好きな本を、何冊でも、何回でも読めます。

▽屋外なので、絵本に接する機会が少ない子にも絵本を読んであげることができます。

・ナーサリー富田幼児園: <http://nurserytomida.com>

・園ブログ: <http://plaza.rakuten.co.jp/terukio/>

今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？

『やりたいこと、やりてえんだろ？ だったら偉くなれ』

TVドラマ踊る大捜査線で和久さんが青島刑事に言った言葉です。

ESD 普及への熱意を持った若者が、財産である体力と時間を最大限活用し、実践活動を積み重ね、社会への影響力を持つような人物になれば、ESD は発展していくと思います。

ふりがな 氏 名	かげうら じゅんこ	都道府県	愛知県	
	影浦 順子			
所属/肩書	中部大学中部高等学術研究所／研究員			
私の ESD活動	中部 ESD 拠点の ESD 活動について			発表者(右端から二番目)
活動の概要 (特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください)				
私は、昨年度より、国連大学から認定を受けた世界約 100 か所の ESD 地域拠点のひとつである中部 ESD 拠点の研究員・事務局員として、中部 ESD 拠点のプロジェクトを補佐してきました。中部 ESD 拠点は、活動対象地を、愛知・岐阜・三重県のエリアとし、地域の持続可能な発展を妨げる自然・経済・社会の諸課題に取り組むため、ESD の「ネットワークづくり」に取り組んでいます。具体的には、2014 年に愛知で開催される「ESD に関するユネスコ世界会議」に向けて、ESD の中部モデルづくりを行う「中部 ESD 拠点 2014 年プロジェクト」を実施しています。中部 ESD 拠点「2014 年プロジェクト」とは、ESD を推進するための「中部モデル」を構築することを目標に、2012 年 7 月 7 日のキックオフ会合から開始したプロジェクトです。現在は、主体別分科会(①企業と NPO、②学校教育、③大学教育)と、横断的テーマ別分科会(④国際協力、⑤伝統文化)の計 5 つの分科会において、異なる切り口で ESD を推進する手法を模索しています。申請者はこれらの運営体制づくりや各種イベントに対して主体的な活動を行ってきました。 また ESD の更なる発展については、ESD の理念を、行政と市民が連携をしながら日本社会に「啓発」するだけにとどまらず、しっかり「根付かせてゆく」ことがまずもって重要であると考えます。一過性のイベントで終わらせるのではなく持続的な活動とする必要があります。「横断的なテーマ性」をもつ ESD は、こうした高度な専門性をもつ限界を内的に見つめ直し、日本社会や若者世代をグローバル化させ、地球規模の問題を積極的に考えるための契機を与える問題提起と考えます。この点を、日本の将来を担う若者世代に啓発するとともに世界に発信してゆきたいと考えます。				
・中部 ESD 拠点: http://chubu-esd.net/				
今後の ESD の発展のために、若者はどのような役割を担えますか？				
地球規模で起きているさまざまな問題を解決するためには、専門家による「専門知」だけでなく、それらの課題に具体的に対応している企業や NPO の「経験知」や、地域に根づいた活動を行っている市民の「地域知」などを統合させてゆくことが重要です。中部 ESD 拠点では、そのための取り組みのひとつとして「2014 年プロジェクト」を始動し、さまざまなステークホルダーが集う「場」の設定、情報交換や連携を行う「ネットワーク作り」を行ってきました。個別の団体や組織を「ESD」という横串でつないでゆく、多面的な討論の場を作りあげてゆくためには、柔軟な思考力と行動力を持った「若者世代」が主体的に動いてゆくことが重要です。本コンファレンスでは、中部 ESD 拠点の取り組みを紹介するなかで、個々バラバラになっていた諸活動や組織をどのようにして若者世代がつないでいったのか、その具体的な貢献について発表をしたいと考えます。				

ふりがな 氏 名	かつまた ひでのり 勝間田 秀紀	都道府県	神奈川県	
所属/肩書	昭和女子大学附属昭和中学高等学校／教諭			
私の ESD活動	高等学校での校内模擬国連活動を通した、高校生の国際意識の醸成と交渉力・合意形成力の育成			

活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）

私の勤務校では、学園目標として近年「グローバル」を掲げ、幼稚部から大学まで国際協力、国際理解のための種々の活動をまさに推進中である。その中で、中高部(特に高校生を中心)の活動の一つとして、学校内において、グローバルクラスルーム日本委員会のスタディプランを参考に「模擬国連校内会議」を開催した。基本的には模擬国連大会の活動と同じように、ある議案を、国別に分かれた高校生が2人1組で参加し、会議の中で担当国の立場に立った議案の提出、話し合いを行い、最終的に一つの決議を行うという形式で進めた。回数を経るにつれて、国連の立場や国際問題への取り組みなどをお互いに調べていく啓発の場としても出来上がっていった。

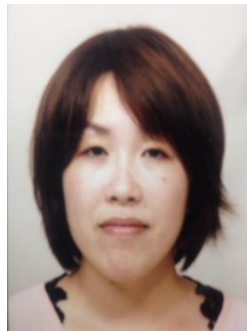
模擬会議を校内で運営、開催して感じるのは、参加している高校生の熱心さと、交渉力の大きな進歩である。初めは拙かった合意形成能力、他との交渉力が場数を踏むことによって飛躍的に成長している。資料を集めて原稿を作るなどの作業ははじめからしっかりできている者も多いが、自ら考えた問題解決の方法や意見を人に発信する力、人を説得する力は、会議の場数を踏んでいくうちに進歩が大きくみられ、見ていて非常に面白い。プレゼンテーション能力、問題のリサーチ能力、「合意」というゴールのもとで問題を解決しようとする能力の向上を目指し、従来のディベートよりも一歩上を目指しての取り組みを行っている。現在は、まだ実践できてはいないが、すべてを英語で行うプレゼンテーションなども外国人教員の協力を仰いで企画している。目標は「高校生のための模擬国連大会」への出場である。日本人は交渉が不得手であると言われて久しいが、ESDを進めることによって、日本の若者の交渉力・外交力を飛躍的に高め、それが将来の国際交流・国際協力を担う主体としての意識を育てていくことができると感じている。

今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？

若者が担うことができるのは、その多様な経験から醸成された新しい国際協力、国際交流であると思う。私は職業が職業なので、どうしても若者を育てるという視点で考えてしまうが、現在、国際交流・国際協力などは様々な学校で種々の機会が設けられており、学ぶ機会やその種類は多岐にわたっている。生徒が国際活動の道に入る機会は多様であるといえる。そうした充実した環境で視野を広げてきた若者ならではの国際協力に大きな期待が持てる。現在は SNS などのツールを用いることで「世界」がこれまでよりも非常に近くなっている。そうした環境の中で育ってきた若者どうしでは、それまでの世代とは全く違った、新しく、若者にしかできない視点による交流ができるのではないかと。例えば Facebook など若者ならではの視点から生まれたコミュニケーションツールであり、世界の若者でそうした交流の輪が広がっていけば、行える国際協力には広い可能性があると思う。

ふりがな 氏 名	かつやま とむひろ	都道府県	福井県	
	勝山 智央			
所属/肩書	福井県立若狭高等学校／教諭			
私の ESD活動	エネルギーをキーワードにした論文を作成し発信する授業			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
私の勤務する福井県立若狭高等学校では、文理探究科1年生に対して、「人文科学・社会科学に関する探究学習」の授業を週2単位で行っている。全国的に原発について議論される今、日本一の原発集中地域に住む本校生徒こそが、原発・エネルギーの未来について議論を行い、自分の考えを持ち、発信しなくてはならない。そこで「2020年までに原子力発電所を全廃するか否か」という共通のテーマで、論文を作成しポスター発表を行った。2学期からは「エネルギー」をキーワードに、環境・地域経済など幅広い分野の中から、自ら課題を見つけ、解決に向かう糸口を自ら考え、論文を作成し発信する活動を行っている。 このような活動を通して、自らが課題を発見し、情報を集め批判的、総合的に分析・整理し、自分の意見を仲間と共有し発信する能力を育成することで、環境や社会上の問題に一人ひとりが注目し、考え、共に解決する自立した市民を育て、持続可能な社会の構築につながると考える。 1学期を終えたある生徒の振り返りには「私が原発のことについて考えたとき一番感じたのは、知識です。（中略）知識がないのに意見を言うのは、無責任だと思いました。（中略）新聞に限らずマスメディア全体を通じて情報を選択したり、二つ以上のものを見比べたり、色々な人の意見を聞いたり、（中略）一つの意見に流されず、自分で考える力がつくと思います。」この生徒Aの振り返りを読むことで、多面的・総合的に課題をとらえ、批判的に思考し判断しようとすることの重要性を理解し、態度も身についたと考えられる。 また本校では、近隣の小中高校や大学・団体を集め、環境・エネルギー・海洋・原発など様々な分野の専門家を集め、パネルディスカッションやポスターセッションなどを行うイベント「環境・エネルギー学会 in OBAMA」を開催したり、「SATOYAMA 国際会議 2013 in ふくい」でポスター発表を行ったりと、環境に関する活動を多く行っている。				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？				
様々なシンポジウムや研究会などに参加し、多くの繋がりをつくることだと考える。 今回のような会を通して ESD を実践する若者同士の繋がりを作り、情報を交換することによって、今後の活動の幅が広がり、学校での ESD 活動の場合、学校同士や大学・団体との繋がりもできる。学校同士や大学・団体との連携により、生徒の繋がりができることで、共同して課題に取り組んだり、お互いの成果を発表・共有したり、日本の若者が共に社会の課題に取り組む理想的な社会を形成することが出来るのではないかと考える。				

ふりがな 氏 名	かとう だいち	都道府県	岡山	
	加藤 大智			
所属/肩書	岡山商工会議所 企画振興部 企画課			
私の ESD活動	旭川清流化のための諸活動			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
当所が行っている旭川清流化運動には、ESD の理念に合致する 3 つの特徴があります。 1 つ目の特徴は「持続性」です。当所が旭川の清流化運動を始めたのは平成 5 年の事だと聞いています。県庁所在都市の真ん中を貫流する旭川を日本一美しい川とすることで岡山のシンボルとし、岡山市の魅力向上へとつなげる事を理念として掲げていました。以後 20 年間にわたり、旭川およびその沿川の清掃活動や川に親しむ活動を続けています。 2 つ目の特徴は「広がり」です。平成 12 年に市民や企業グループを里親、旭川河川敷の一定区間を里子として養子縁組(アダプト)を結ぶ「旭川アダプト・プログラム」を開始。それぞれが決められた場所で清掃活動を行うことで河川全体の清掃につなげ、住民の河川保護意識を高め、清掃活動を普及させる結果へとつながりました。今年の夏に行われた旭川の一斉清掃では 1816 名に参加していただくなど定着しています。 3 つ目の特徴は「企業参加」です。活動を始めたころ、「企業の社会的責任」や「コンプライアンス」という言葉が聞かれ始め、企業のモラルが問われる時代となった事も影響しています。商工会議所の企業ネットワークを生かし、旭川清掃活動への活動と呼び掛ける事で、地元企業の社会的活動のきっかけとなりました。現在でも意識を高く持っていており、毎回 100 近い企業・団体にご協力をいただいています。 こうした旭川を大切にする活動の延長上に、当所では環境負荷低減のためのコミュニティサイクルの利用促進や環境マネジメントの普及を図るエコアクション 21 認定登録のお手伝いを行っています。私は当所職員となり日が浅いのですが、先輩たちの意思を受け継ぎ、次の世代へとつなげていきたいです。				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？ 今後長きにわたって社会を支えていく実践活動として、ESD のさらなる発展と普及が必要です。そのためには、若者が集まって力を合わせるネットワークの構築が求められます。幸い、岡山市をもっとよくしていこうと活動をしている若者中心の NPO や市民団体が存在しています。私はこれまで業務として旭川清掃などの活動をしてきましたが、今後は自分からそういった活動に参加し、岡山の将来について考えるとともに自らもネットワークを築いていきたいと考えています。また、団体同士をつなげ、活動がさらに大きな輪へと広がるように、接着剤の役割を果たしていきたいです。				

ふりがな 氏 名	かわかみ まや	都道府県	神奈川県	
	川上 麻耶			
所属/肩書	横浜市立永田台小学校／教諭			
私の ESD活動	環境＝私たちにつながるすべての命			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
「命」を核として授業を構成してきた。 子ども達が自分たちの町を大切に思い、地域の一員として自分にできることを考え、実行し続けられること。自分の命、周りの人の命、植物、動物の命を大切に思い、自分の意志で行動できる力を育てることを目標として取り組んでき取り組みは、子どもたちの発達段階、地域の特色によって異なるが、問題意識をもつことや、たくさんの本気の大人に出会うことで、自分の身の回りでできることを真剣に語り合い、「あいさつをする」「感謝の気持ちをもつ」「本気で考える」など学校を卒業しても、自分で続けられる力を育んでいこうと取り組んできた。 また、取り組んできたことを発信する場として、毎年東京ビッグサイトで行われる「エコプロダクツ展」に5年連続出展している。そこで、通り過ぎる大人に声をかけ、語り合っている。子どもたちの考えを発信する場を自分の住む地域だけでなく、外部の全く知らない人と接する場を設けることで、意識が高まったり、自分たちの考えの甘さに気がついたり、さらに真剣に取り組んでいこうという意欲につながった。そして、子どもたちが本気で活動していることを、毎年発信し続けることで、聞いてくださった方が「自分でも行動しようという意欲につながった」というお言葉を何度もいただいた。このように子ども達の意識は続けることで変化し、本気で自分のことや地域のことを考え、行動し続ける姿が見られるようになってきている。				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？ 未来を担っていく子どもたちが、ESD の取り組みによってどのように変化し、行動し続けようという気持ちをもっているのか、また実際に活動しているのかを話し合う中で、私自身が変化し続けていかなければならないと思う。 子ども達一人ひとりが「自分」のことを大切に思えないと、周りの人やもののために行動しようという気持ちはわいてこないと私は考えている。だからこそ、大人が自分のやってきたことや、考えていることを子どもたちに本気で語る必要があると思う。大人だって悩み、考え、行動することを繰り返していることを伝えることこそが ESD である。そして、自分自身を大切に思えると、周りの人やもののありがたみを感じ、大切にしていこうという思いを持てるのだと思う。 今未来を担うものとして、考えていくことや悩んでいることを語り合うこと、子どもと真剣に向き合うことがなによりも大切であり、続けていかなければいけない。				

ふりがな 氏 名	かわはら なほこ	都 道 府 県	兵庫	
	河原 奈穂子			
所属/肩書	株式会社フェリシモ 生活雑貨調達グループ 兼 チケッティ事業部 兼 しあわせ共創部／主任			
私の ESD活動	ボーダーを超えて繋がり、尊重し合える社会実現 のための国際理解・地域貢献			

活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）

現在、所属する企業の、海外雑貨全般の輸入調達業務を担当しております。

そのなかで今回ご紹介したいのが、「みんなの地球村」という事業です。

当事業は、アジアを中心とした発展途上国の生産者ともに企画生産したアイテムを輸入販売する、フェアトレードビジネスの形をとっています。単に生産できた数だけを販売する、というものではなく、オリジナルで開発した商品が、その魅力を失わない新鮮なうちに、購入希望者全員にお届けしたいという想いから、受注と生産を同時並行で行っているため、受注数が多くなると必然的に、安定した品質確保や生産管理の実現がとて難しくなります。

この事業の調達担当を引き受けた以後は、この両立のために、過去の実績を洗い出し、受注予測の精度を上げることに尽力したり、商品の販売媒体を制作するチームと協力体制をつくることで、在庫リスクを最大限回避したり、企画段階での会議にも積極的に入り込み、生産背景や受注数に応じて可能になる対応を事前に徹底的に話し合うことで、予測以上の受注が来た場合にも即座に対応できる生産体制づくりに努めました。

結果、1年間で販売された約40点の商品に対し、98%以上の安定供給を実現できたのですが、この時、自らがビジョンの創造・改革を行うことで、私の夢である「個性を尊重し、差を認めあい求めあう社会の実現」に微力ながらも働きかけることができるかもしれないと思いました。

上記はまだ、その実現のための土台にすぎません。次なる目標は、自らの業務範囲や発展途上国と日本間のフェアトレードビジネスにこだわらず、世界中の国々が各地の得意分野を活かし、お互いの文化を象徴し合えるような生産・デザイン・流通網を開発することです。今回様々な分野でご活躍されている方との交流のなかで、更なる発展のヒントをいただければと思っています。

・みんなの地球村 Facebook: <https://www.facebook.com/earth.felissimo>

・みんなの地球村: http://www.felissimo.co.jp/kraso/v14/cfm/products_list002.cfm?wk=68584

今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？

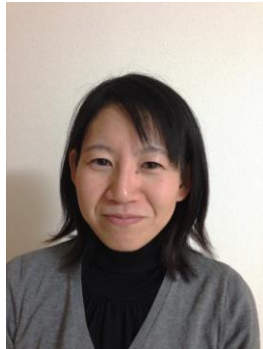
私たち若者には、地球というたったひとつの惑星の中で、何らかの状況を良くしたいと願い、同じような想いを持って各地で活動する仲間をつなぐ、「媒介者」としての役割があると思っています。

国・地域・言語・性別・宗教……世界には様々なボーダー（見えない壁）が存在し、それが時に争いの種となっています。しかし同時に、古くから変わらない人間の情や、新しいものならオープンメディアのように、その壁をやすやすと超えて、互いが求める限り、世界中の人が容易に協力し合える状況にあることも確かです。

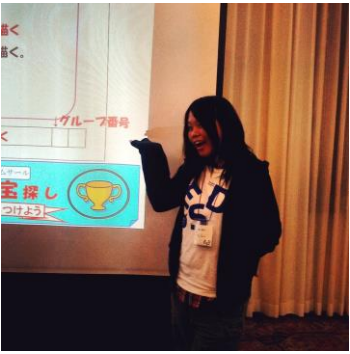
世界各地にもいる同じ志を持つ人たちが、ボーダーを超えてその取り組みを互いにサポートし合える環境や場をつくること＝彼ら同志を繋ぐ「媒介者」となることが、これからの時代を生きる若者が担うべき役割なのではないでしょうか。

ふりがな 氏 名	きむら よしかね	都道府県	東京都	
	木村 芳兼			
所属/肩書	鹿角のエネルギーを考える会／代表 パタゴニアインターナショナルインク日本支社			
私の ESD活動	私は地域社会が分散型で地産地消できる社会を実現させていく地域づくりを秋田県鹿角市で進めています			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
パタゴニアというアウトドアウェアを製造、販売する企業に勤めています。直営店部門の目白店でアシスタントマネージャーをしております。会社のミッションは「最高の製品を作り、環境に与える悪影響を最小限に抑える、そしてビジネスを手段として環境危機に警鐘を鳴らし解決に向けて実行する」のもと、環境団体をサポートして問題解決に向けてパタゴニア直営店を利用して多くの市民に問題を伝える機会をストア内でマネジメントしており、イベントの実施、フィールドワークなどを運営してまいりました。中でも一人から始めた活動を支援したことは自分にとっても有意義な時間でした。導水事業反対の活動を支援したのですが首都圏の水危機による何年も作られることのない事業です。関東でも鮭が遡上するような豊かな自然をこれからも残していこうと訴えるような団体です。そんな問題を解決に向けてアクションさせていくために地元のフィールドガイドやアウトドアショップを巻き込んで親子に参加をしてもらい自然を満喫し体験し、そして考えるという連続イベントを開催して同時に支援者になってもらい活動に参加をってもらうような取り組みを実施しました。 成果としては、その場所に定期的に訪れるような場所が出来て事業を止めることは出来ていませんが小さなコミュニティが出来たことです。そのような取り組みを仕事を通じて働きかけております。 また、個人の活動としては秋田県鹿角市（かづのし）で自然エネルギーシフトの活動をしています。				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？				
次世代に受け継いでいくという有機的な思考のもと実践していくことが社会に対しての責任の果たし方だと考えます。自分たちの消費のあり方や、使い方、また文化を大切にする心や継承していくこと、社会に完全に依存することをせずに自分の仕事は自分で作っていけるような生き方を教育の立場から支えていけると良いと考えます。				

ふりがな 氏 名	くにもと りかこ 國本 莉花子	都道府県	広島県	
所属/肩書	福山市立樹徳小学校／教諭			
私の ESD活動	①伝統文化教育の推進 ②ESD 日米教員交流プログラムへの参加 ③日米の小学生間で、国語科の単元での交流			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
①伝統文化教育の推進 2010 年、2011 年に、本校の伝統文化教育研究に携わった。福山市の伝統工業品である琴のパンフレットづくりや、能や墨絵の体験的学習を行った。子どもたちが「受け継がれてきたもの」「失われつつあるもの」を発見し、体験を通してそれぞれの知を獲得できるよう努めた。琴パンフレットづくりでは、職人の方を訪ねてインタビューすることによって、およそ400年にもわたる伝統工業を受け継いできた方の思いに触れさせることができた。「まずは自国の文化のよさに気付かせなければ、他国の文化を尊重する態度を育めない」と感じた。 ②ESD 日米教員交流プログラムへの参加 今年の4～6月にフルブライトジャパン主催 ESD 日米教員交流プログラムに参加した。アメリカを訪れ ESD 教育について学び、ESD 教育に携わる日米の先生方と交流するなど貴重な経験をした。このプログラムに参加することによって、日本に根付く「共生」の考えを改めて認識し、ESD の礎となる考え方であるという思いをもった。また、この経験を通して、私のようにプログラムに参加した教員が ESD や共生の心を意識してだけでなく、全国どこで学んでも ESD につながる教育が受けられるような実践研究を重ねていかなければならないのではないかという意識が芽生えた。 ③アメリカの小学2年生と国語科「ずうっと、ずっと、大すきだよ」を通した交流 現在担任している第1学年の学級の児童が、アメリカの小学2年生と国語科「ずうっと、ずっと、大すきだよ」の単元を通して交流している。児童自身が「ずうっと大好きだよ。」と伝えたい相手は誰か、それはなぜか、ということを書き文で表し、互いに発表し合う。総合的な学習の時間など地域の特色が生かされる学習で異文化理解教育を行うのではなく、教科教育を通した異文化理解教育を行おうと試みている。				
・ESD 日米教員交流プログラム: http://www.fulbright.jp/esd/esd10.html ・福山市立樹徳小学校: http://www.edu.city.fukuyama.hiroshima.jp/shou-jutoku/				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？				
自分のコミュニティの ESD 発展だけを考えるのではなく、今を生きる子ども達がどの学校で学んでも ESD につながる教育が受けられるような情報の拡散、共有を目指す。 ①ローカルな文化のよさを再発見(再認識)する。 ②ITの活用や、様々な場へ参加することを通して、グローバルなネットワークを構築する。 ③国内、国外の異文化をもつ子ども同士をつなぎ、交流が深められるような学習活動を設定する。 ④どのような学習活動を通して、ESD を実践しながら共生の心を育てているのか情報交換をしたり、提案したりしていく。 その過程で、ESD の3つの視点「経済」「環境」「社会」の中心に「共生」のキーワードを位置づけて ESD を推進していくことについて協議し、共生の心をもった子ども達を育てる。				

ふりがな 氏 名	くまざわ ほづみ	都道府県	静岡県	
	熊澤 ほづみ			
所属/肩書	加藤学園暁秀中学校／教諭			
私の ESD活動	多文化共存と国際理解によって視野を広げ、 ライフスタイルを変えよう！			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
本校で実施している International Baccalaureate の教育理念のもと、国際理解教育を実践して、将来国際人として活躍する人材を育成することを念頭に教育している。生涯にわたる社会貢献の意識が根ざすように、机上の学習、教室内の活動にとどまらず、生徒たちの継続的な学習と活動を通して指導している。 国際理解教育の一環として、「アフリカを知る」「幸せとは？」「日本を紹介する」などの教材を作り、グループ活動や討論会を開いた。また、毎年「世界一大きな授業」に参加したり、市販の教材を使って「支援する前に考えよう」や「世界の食卓から」を使ってゴミ問題を考えたりして、自分たちのライフスタイルを見直すことから、自分たちの役割を見つけるように考えるようにしている。特に、「支援」については、災害援助や教育を受けられない子供たちに対してどのような支援がふさわしいのか、支援先が何を求めているのか相手の立場に立って考えることを重視した。また、支援が一方的にならないためにはどうすればいいのか、「支援」＝「募金」になりがちだが、お金に頼る支援以外にどのようなことができるのか、中学生の立場でもできることに気付かせるように指導した。生徒が主体となり考えさせる授業展開となるように教材作りを工夫し、参加型学習を中心とした活動を取り入れて、生徒たちの気づきを大切にしてきた。中学の3年間を通して、多様な視点で物事を考える思考力を鍛え、継続的な活動をしていくことで、生涯にわたって国際理解をしていくことの意義や国際貢献を自分なりの形で続けていくことを伝えている。 継続した教育をしてきたことで、Free the children の活動に生徒たちが興味を持ち、「書き損じ葉書の回収」によって東アフリカにヤギを送る活動や、モンゴルの図書館に絵本を送る活動を生徒主体で行うことができた。				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？ EDSの発展のためには、「知る→自分が変わる→広げる→つながる→続ける→世界を変える」という流れが大切だと考え、実現には時間がかかることだ。だからこそ、一時的なことだけでなく、長期的な視野をもって指導していくことを重視し、子供たちが生涯にわたって世界と関わっていく教育をしていきたいと思っている。そして、一人で世界を変えることは難しいけれども、間接的でも「自分が世界のためにできること」を意識した生活を送ることで、多様な人々と出会いを生み出し、世界とつながる機会にも巡り合え、人の輪が広がっていく。国際理解をしていく中で多角的な視点が育まれることは、国際貢献に限らず、人としての生き方を考えることにもつながっている。私たちは、多くの人の人生の一部となっている自覚の下、これからの世界を担う子供たちの育成とともに、その子供たちの明るい未来のために今抱えている諸問題を解決していくことに尽力したい。				

ふりがな 氏 名	さいとう ふみこ	都道府県	宮城県	
	齋藤 史子			
所属/肩書	宮城教育大学大学院在学			
私の ESD活動	仙台いぐね研究会に所属し、環境教育を大学生で企画・運営し市民に情報発信している			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
私は、宮城教育大学社会科教育人文地理学を専攻し小金澤孝昭教授の研究室に所属しています。また“持続可能な開発のため教育”について世代や職種の異なる方々と連携し、NPO仙台いぐね研究会を運営し国内外で幅広く活動してきました。現在福島県委託事業「大学生の力を活用した地域活性化事業」で、西会津町の過疎化・高齢化が深刻な限界集落とされる地域で、地域の方々と共に活力に繋がるよう活動をしています。 活動内容は、第1に地域を知り他地域の人間の視点として地域資源(歴史・景観・自然・人的ネットワーク等)の発掘です。それを地域の方にお宝マップとして可視化・共有化してもらい、地域の魅力を再発見・再認識してもらいます。第2に、私たちの専門分野、人文地理・農業地理の学びを実践活かし、主要産業の農業調査(世帯状況・農業労働力状況・他出した親戚調査)を実施します。地域の資源を地域の人と共に認識します。 現在活動を行っている西会津町の富士地区は、長年都市部との祭りや四季の行事を活かし交流人口を増やしていました。しかし、今後も高齢化が進行する地域を考えると、農地維持や経済的な支援者は最も身近な親戚ネットワークであると提案しました。その結果、集落から他出した親戚に「四季の便り」として地域の情報を発信し、今後農産物や地域伝統食の加工品・レシピ等の直販に繋げていくことになりました。 現在東北被災地は、過疎化や高齢化が進行していた地域はその速度を格段に早めた状況にあります。その中で、地域での経済的に生業や営みを維持しながら環境を守る大変さに悩まされています。東北地方の現状は、今後日本各地で起こり地域差を孕みながら課題になっていくと考えられます。今の宮城県・被災地東北の現状を日本のESDと向き合う若者と、世界の人々に発信したいと思っています。				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？ 限界集落での地域活性化の取り組みをして感じるのは、若者が知らなければならない知恵・知識や技術や営み、文化などが沢山あるということです。若者が評価し、情報発信のツールを活用して光を当てることがESD発展の為にまずできることだと思います。				

ふりがな 氏 名	さとう なつこ 佐藤 奈津子	都道府県	神奈川県	
所属/肩書	ラムサールセンター／ボランティアスタッフ、 文教大学国際学部在学			
私の ESD活動	ラムサール条約に基づく「賢明な利用」実践の ための環境教育プログラム作成と運営補助、ファ シリテーション			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
北海道・鶴居村出身。釧路湿原を通じて生物多様性や観光などに関心を持ち、小学5年生の時にアジアの湿地周辺に住む子どもの交流プログラムに参加して以後、ラムサール条約にかかわる研究や調査・普及啓発活動を行うNGOラムサールセンターの運営する環境教育プログラム「KODOMO ラムサール」「KODOMO バイオダイバシティ」「ESD のための KODOMO ラムサール」に2006年より参加。その湿地ごとに特色あるフィールドワークなどを通じて文化や歴史、現在抱える問題について学ぶ。のべ15回以上参加し、議論のリーダーとして積極的に活動。国内外で KODOMO ラムサールに参加した子ども達のネットワークづくりを行う。2008年には韓国・昌原で開催された第十回ラムサール条約締約国会議の開会式で子ども達の積極的な貢献をアピールし世界に向けて発信した。大学入学以後、ESD の体験者として国際学や教育学を学びながらラムサールセンターボランティアスタッフとして日本全国で開催された「ESD のための KODOMO ラムサール」の企画・運営にファシリテーター補助として携わっている。そのほかにもラムサールセンターの CEPA (Communication, Education and Public Awareness) 活動の一環としてエコライフフェアや学生バードソンなどの普及啓発イベントに参加している。 KODOMO ラムサールは、KODOMO バイオダイバシティ、ESD-KODOMO ラムサール活動へと発展し、湿地の「めぐみ」と「人と湿地と生きものたちの共生」を学び、全国各地の登録湿地で活動する子どもたちと議論し、その集大成をメッセージや「いきものポスター」としてまとめてきた。子どもたちはグループや全体での活発な議論を通じて湿地のめぐみである「宝物」探しに取り組む。				
・ラムサールセンター: http://homepage1.nifty.com/rcj/menu.htm ・世界子どもラムサール COP 報告: http://homepage1.nifty.com/rcj/japanese/kodomo/children.COP.htm				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？				
文部科学省でも「グローバル人材」育成について様々な施策が試みられている中で、ユースは特に情報の主体的な選択と享受能力を鍛えることが重要である。また日本人特有の和を尊ぶ気持ちを忘れることなくコミュニケーションをとり、積極的な日本人としてのイニシアチブを発揮することが、これからユースが教育の持続可能性を高め貢献するために担うべき役割である。 ユース同士のコミュニティ形成は他国・多民族・多文化の理解の増進を図りながら世界市民意識を持てるものが望ましい。とくに KODOMO ラムサールのような環境教育プログラムをモデルとして紹介し、そこで構築されつつある子どもたちのネットワークや、教育の現場で子どもたちの主体性と意見を引き出す「ファシリテーター」の重要性などについての情報を共有したい。また各自の活動をさらに多角的なものにし、さらに下の世代に還元しながら社会的影響力の向上を若者だからこそ目指したい。				

ふりがな 氏 名	しみず じゅんき 清水 純樹	都道府県	東京都	
所属/肩書	大田区立大森第六中学校／教諭			
私の ESD活動	「ホテル復活プロジェクト」等の環境教育、 「災害に立ち向かう」防災教育などにより地球市民を育てる			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
<環境>（活動内容）洗足池ホテル復活プロジェクト、空心菜や植生いかだによる洗足池水質浄化、洗足池公園および周辺朝清掃ボランティア、各教室にてゴーヤグリーンカーテンづくり （成果）ボランティア活動を通して、生徒は環境について考え行動している。その結果、生徒の自己肯定感を高めるのに役立っている。 <防災>（活動内容）避難所開設訓練、各生徒席にヘルメット設置 （成果）「災害に立ち向かう中学生」の育成を目指し、学校を拠点とした避難所開設訓練及び防災訓練に参加している。その結果、学校防災活動拠点整備事業モデル校として認定された。 <まちづくり>（活動内容）大岡山花壇メンテナンス、大岡山花壇へ芝桜植樹、大田区の特産物である馬込三寸人参を存続活動 （成果）「地域は屋根のない学校」として人と人とのつながりを大切にする気持ちの育成に繋がっている。また、道行く人にも直接「ありがとう」と声をかけられることで、生徒の自己肯定感が高まる。 <国際理解>（活動内容）エコキャップ回収活動（大森六校区の小学校にも協力を依頼し回収。ワクチンを購入する団体へ寄付）ACC「特定非営利活動法人 危機の子どもたち・希望」の活動（ベトナムへYシャツの送付、ラオスの子どもたちへ手作り絵本の送付、カンボジアの子どもたちへ手作りしおりの送付） （成果）世界の中の人として、どのように生きていくべきかを考える機会となり、進路選択にも役立っている。 <農業・食>（活動内容）修学旅行での食農教育（修学旅行は、岩手県花巻市を訪れて民泊を実施。各家庭で農業体験をする。）育てたゴーヤを使った給食（ゴーヤグリーンカーテンを夏休みも休むことなく各クラスで分担して水遣りを行い、育ったゴーヤを給食で食べる。） （成果）生徒ひとりひとりが実体験をすることと民泊先で生まれる新しい絆によって、農業について身近に考えるようになる。				
・大田区立大森第六中学校： http://academic3.plala.or.jp/om6j/				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？				
地球市民としての価値観や思考・判断・表現力を磨き、自らの考えに基づいて社会に積極的に参画することこそ最大の役割であると考えます。紛争や環境問題、貧困など複雑な問題が地球規模で進行する今日、持続可能な社会をいかに築いていくかの明確な答えは誰も持ち合わせていない。だからこそ、次の世代を担う若者が多様な声を発し、できる限り沢山の代替案を探索する必要がある。 政治、ビジネス、金融、エネルギーなどにおける現行のシステムが持続不可能であることがあらゆる方面から指摘されている一方、教室で生徒達の考えを聞くとそれらに縛られない多様な価値観を持っていることに気づくことがある。教育の役割はこうした多様な声を結びつけ、拡大させ、地球市民を育てていくことにあると思う。政治に関わる市民として、あるいは経済の行方を選択する消費者や投資家として、持続可能性を目指した行動をとり続けることが世界をシフトさせていくと私は考える。				

ふりがな 氏名	たおか ようこ	都道府県	愛知・三重	
	田岡 洋子			
所属/肩書	愛知黎明高等学校／教諭、ESD in 三重			
私の ESD活動	ESD は私の行動指針です。ESD をそうさくし、 ESD 仲間を増やすことが、私の ESD 活動です			

活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）

【愛知黎明高等学校（学校法人 愛西学園）】

地域特性に基づいた教科横断的なカリキュラムを実施しています。具体例を挙げると、国際理解ワークショップとJICA訪問で世界と自分のつながりを意識する〔国際探究コース〕、校舎周辺の生態系調査を行い環境問題と向き合う〔自然探究コース〕、地元PR商品を検討して地域活性化を試みる〔地域探究コース〕、生涯スポーツの重要性を学びNewスポーツを考案する〔アスリート探究コース〕など ESD のエッセンスを盛り込んだ授業を展開し、多文化共生の時代を生き抜く力を育てています。また『まちは学校』を合言葉に、地域市民に支えられながら教育活動を進めています。愛知県弥富市との定期協議会を重ね、駅伝大会や国際交流などの行事を協働開催したり、市役所や地元企業でインターンシップを行う等、地域と学校の協働での教育づくり、地域づくりに取り組んでいます。

【ESD in 三重】

《E:ええやん、S:すごいやん、D:できるやん》という三重弁のキャッチフレーズとともに、ESD の概念を伝え、ESD の輪を広げる活動を、2005 年から行っています。三重県で ESD を搜索し創作するための会報誌『ESD そうさく隊レポート』発行や、市民講座（「アフリカ裏側探検隊」、「チャイハナ キルギス」、「災害避難マップづくり」など）の開催、イベント（「ワールド ティーパーティー」、「手打ち伊勢うどんで地産地消」など）の企画、スタディーツアー（モロッコ、富士エコ登山など）実施、フェアトレードカフェ出店による被災地支援など、地球のためにできることを地域でこつこつ続けています。直近のイベントは 2013 年 8 月に開催した『中東シリアの平和を願う写真展』です。ESD in 三重では 2006 年にシリアと三重を繋いで生中継交流を行なったのですが、写真展では平和だった当時と内戦の起きている今を比較し、来場者と共に持続可能な地球について考えました。

・学校法人 愛西学園 愛知黎明高等学校: <http://www.a-reimei.ed.jp/index.html>

今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？

ESD を初めて知った 2005 年、私は 25 歳の会社員でした。当時「ESD＝地球の未来のための活動」だと信じていました。しかし 33 歳の私にとっての ESD は故郷を愛おしむ気持ちのようなもので、未来や地球といった遠く大きい存在ではありません。「環境問題」と聞いて外国の砂漠をイメージしていたのが、伊勢の海や熊野の山が浮かぶようになりました。ボランティア活動こそ ESD だと以前は考えていましたが、今は毎日の暮らしが ESD の実践だと感じています。

若者は変化に柔軟で、新しいものを取り入れることに貪欲です。ESD を自分のものとして取り込み、ライフスタイルを変えることができる世代であると思います。そんな若者一人ひとりの持つ“変わる力”が、社会を変えるエネルギーとなるのではないのでしょうか。ESD の意義と魅力が若者世代から上の世代や次世代へと波及していくよう、ESD 実践者として社会への発信に力を入れたいと思います。

ふりがな 氏 名	たがの あつひさ 多賀野 惇久	都道府県	
所属/肩書	宮城教育大学教育学部在学		
私の ESD活動	米食・稲作文化を題材とした、タイ・アユタヤ県、 トラン県と宮城県大崎の小学校のインターネッ ト交流		
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）			
私たち宮城教育大学の学生 10 名は異文化理解と多文化共生の観点から、タイ・アユタヤ県、トラン県の小学生、高校生と宮城県大崎市立大貫小学校、同市立沼部小学校の児童らをインターネットビデオ会議システムによって相互に交流させるプロジェクトを企画・実行しました。 タイと日本はどちらも米食・稲作文化を持つという点で共通しています。大貫および沼部小学校は以前よりユネスコスクールとしての活動を実施しており、児童らはタイについての簡単な知識を持っていました。私たちは 2013 年 6 月に両校で事前学習を行い、タイの米食・稲作文化についてさらに興味を持てるよう、タイ米とタイの代表的料理(トム・ヤム・クン)を調理して児童らに食べてもらいました。 翌月には学生プロジェクトチームがタイに渡航。同様にアユタヤ県の私立ジラサート学園で日本米を調理して児童らに食べてもらったのち、同校と大貫・沼部小学校とをインターネットビデオ会議システムで結んで交流を開始しました。児童らは互いの食文化を体験した感想を話しあったり、互いの地域の稲作・気候・日常生活などについて紹介しあったり豊作を祈る踊りを体験したりすることで、互いの文化を理解し、尊重する態度を身に付けることができました。 なお、本活動の運営は「顔が見える交流」を目標に行いました。単にビデオ会議システムで双方を結ぶだけではなく、事前学習という形で学生プロジェクトチームと日本の小学生が前もって顔をあわせておくことで、児童らが交流時にタイを、実感を持った交流先として認識できるように配慮しました。 本活動で子どもたちが初めて見る日本のお米や踊りなどに目を輝かせて“great!” “interesting!”などと言ってくれた様子がとても印象的でした。双方の児童生徒の互いの国や文化についての興味・関心を引き出すことができたのだと思います。本活動を通して異文化理解と多文化共生の観点から多少なりとも ESD に貢献できていれば幸いです。			
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？			
ESD 発展のために若い世代に求められることは 2 つあると考えます。 1 つ目は実現可能なレベルでの取り組みを着実に、継続して行っていくことです。「ライスプロジェクト」のような取り組みは地味でも確実に ESD の一側面を担うことができます。 2 つ目は周囲の人間を活動に巻き込んでいくことです。日本/世界では様々な取り組みがなされていますが ESD が一般に広く認知されているとはまだまだ言えない状況です。持続可能な社会の実現は未来に向かって、つまり私たちの世代が生きる時代に向かって求められています。若者がグローバルなレベルでの活動を展開することは様々な側面から困難がありますが、そのなかでも「これからの世代を担う私たちは持続可能な社会の実現・ESD について真剣に考えているのだ」ということを上の世代にアピールすることはできます。 地味でも、しっかりと問題に向き合い、活動を展開してゆくことが求められているのだと考えます。			

ふりがな 氏 名	たかの ひろゆき	都 道 府 県	福 島 県	
	高野 寛之			
所属/肩書	福 島 県 立 福 島 高 等 学 校 ／ 教 諭			
私の ESD活動	東日本大震災からの復興のための、SSH 事業を中心とした未来の復興を担う人材育成			

活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）

福島県立福島高校では、Future From Fukushima「ふくしまから始めよう」という福島県のスローガンをもとに、福島を復興する未来の担い手の人材育成に力を入れています。東日本大震災および原発事故により県外へ流出する人口、特に若年層の流出が顕著となっている福島県では、復興の担い手となる若年層の育成が急務となっています。このような状況の中で、福島県を代表する福島高校では、平成 19 年より文部科学省に指定された SSH（スーパーサイエンスハイスクール）事業を中心として、福島高校だけでなく県内の主要高校との連携により主に中高生の理数系教育に力を入れています。持続可能な開発のためには、まずは将来の担い手となる生徒の意識を社会に向けていくことが第一と考え、ESD（持続可能な開発のための教育）の一環として、理数系教育を中心とした様々な教育活動を行っています。

まずは、SSH 事業の一環として FSC（ふくしまサイエンススクールコミュニティ）を立ち上げ、県内の協力校と連携して福島復興人材の育成にあたっています。各校が日頃の研究内容を発表し合ったり、大学教授の講演を聞いたり、理数系の内容についての勉強会・講習会を開いたりしています。また、未来の医療を支える医療従事者を増やすために、福島県立医大などと連携して医療の現場を体験させるなどのセミナーを開いています。また積極的に海外連携を進め、台湾・韓国・イギリス・フランスなどの高校生との交流の中で、プレゼンテーションなどの発表を通じて福島の現状を世界にアピールしています。

以上のような活動を通じて、次の世代を担う若い人々が社会に積極的に関わり復興への課題に取り組むことで、社会にフレッシュな刺激を与え、明るい今後の未来・見通しを見せることで人々の希望を取り戻し、社会全体に好循環が生まれるような活動を目指しています。

・福島県立福島高等学校：<http://www.fukushima-h.fks.ed.jp/>

今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？

若者は、利害関係や既成の枠にとらわれない視点を持っている。様々な国や地域の人々と交流し、人類が直面する多くの課題について深く考え新たな知見・視点・知恵を獲得し、それを共有することで自らの社会への意識を高め、それを様々な場面で発信する。そうすることで、利害関係や既成の枠のないところで地球規模・人類的規模の課題を人間らしい素直な目で受け止めることができる若者だからこそ、周囲の人は耳を傾け、様々な人の意識を変えることのできる可能性が大いにある。

また、若い世代だからこそ、さらに若い世代とのつながりを持ちその影響力が強く、様々な知見・視点・知恵を次の世代に好循環させるのに大きな役割を担っているといえる。若い世代からさらに若い世代へと伝達し、早い段階から意識を高めていくことで、成熟して実社会を動かす立場になったときにしっかりと目的意識を持った行動ができようになる。

ふりがな 氏 名	たつの まどか 辰野 まどか	都 道 府 県	
所属/肩書	一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト (GiFT) / 専務理事 兼 事務局長		
私の ESD活動	GiFT を通じた「地球市民（グローバル人材）」の 育成とグローバル教育 HUB 構築		

活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）

『70 年後の地球社会へ私たちは今、何を贈ること(GiFT)ができるでしょうか。』

GiFT はこの問いを社会に投げかけながら、“競争”だけでなく“共創”あふれるこれからの世界において、多様な人々とポジティブに繋がり、共に新しい価値を創造する「地球市民(グローバル人材)」を未来へ贈るムーブメントを起こす活動をしています。そのために GiFT では産官学民とも連携しながら、様々な活動を行っています。

1.多様性から新たなものを生み出す「地球市民(グローバル人材)」の育成

「地球市民(グローバル人材)」の育成に際しては、“自分自身と繋がること—自分を振り返り理解し、自分自身を受け入れ、受け止めること—”が自分の軸を持ち多様性あふれるこれからの地球社会を生きる力となると考え、グローバル教育における「体験型」「参加型」「多様性(多文化)型」の学びの場を特に大切にしています。自分の身近にある多様性に気づき、自分の価値観にも触れることができる『多様性ダイアログ』や、グローバル社会で活躍する先輩たちとの対話から世界の中での自分の姿を考える『ロールモデルカフェ』、その国に住む人たちと“共創”を生み出す『海外研修プログラム』、一人ひとりの海外体験を可視化・価値化させる『事前事後研修』など様々なプログラムを行っています。

2. 地球社会に参画できる担い手であるファシリテーター育成

参加型の学びの場、体験の場を生み出すことにより、社会に参画できる人材を育成するには、場を創れるファシリテーターの存在が欠かせません。そのため GiFT では、講座やワークショップを通じてファシリテーターの育成にも力を注いでいます。

3. 地球市民育成を繋ぐグローバル教育 HUB

また様々な地球市民育成の取組を広め、繋げていくために、「地球市民(グローバル人材)」育成に関する国内外の取組を集める『グローバル教育 HUB』というウェブサイトを経営し、知識・経験の蓄積にも取り組んでいます。

・GiFT: <http://j-gift.org/>
・グローバル教育 HUB: <http://global-education.info/>

今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？
「地球からたくさんの恩恵を受け、過去のリーダー達から引き継ぎ今を生きる私たち」という、場所や時間を俯瞰した視点を持つことが、グローバル教育を通じた「地球市民(グローバル人材)」育成について考えるときの1つの鍵であり、それは、ひいては ESD の発展にもつながる視点であると GiFT は考えています。 そのために若者たちには海外体験や日本での多様性への気づきなどの経験を通じて、そこから世界とつながり、さまざまな価値観に気づき、学び、自らを発見してだけでなく、その経験や学びを周りと共有し広めていくことが大切であると考え、GiFT では『グローバル教育 HUB』という「地球市民(グローバル人材)」体験の共有空間を創りました。 若者が自分の経験、気づきを社会に発信し、共有すること、そしてこれからのグローバル社会の担い手としてそれぞれが一步を踏み出し社会に貢献していくことこそ、ESD の発展につながる役割であると考えます。

ふりがな 氏 名	たひらき かんたろう	都道府県	富山県	
	田開 寛太郎			
所属/肩書	富山県立大学大学院 工学研究科 環境工学専攻 資源循環工学・環境政策学部門 博士前期課程 1 年			
私の ESD活動	公益財団法人富山市ファミリーパーク公社における ESD プログラムの開発と実践、教育効果の検証			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
富山市ファミリーパークを舞台に、タブレット端末を活用した2泊3日の宿泊型体験ESDプログラム「呉羽丘陵たんけん隊」を試行した。富山市ファミリーパークは、動物園施設として環境教育等の実践をするだけでなく、現代に合った「新しい里山」の利活用を模索しているなど、動物園施設としての立場と、里山としての立場の両方を兼ね備えた、非常に独特な施設である。ESD プログラム開発に向けて、要素は次の通り。①自然と人間が調和する里山で行うこと。②動物園施設として、多様な生物の世界やいのちの繋がりを伝える等、気候変動、生物多様性、消費経済といった多様な分野の横断の可能性があること。③多様な主体が参加、取組できる場であること。④呉羽丘陵を仲介して、市民一人一人の力により、地域社会を転換させる可能性を持つこと。⑤富山市が採択された「環境未来都市」の構想において、呉羽丘陵での「人と自然との共生＆再生可能エネルギー」フィールドミュージアム形成を推進する事業が取り組まれており、現代の要望に応えた新規性の高いプログラムの開発が期待できること。 成果として、タブレット端末を使用することで、作業の効率化、学習者の自主性の向上、プレゼンテーションの実現性を高める等、ESD で育みたい力の醸成に寄与した。今後の課題の一部として、学習者は、主体的に情報収集を行い、それらを分析する能力を更に発展させる必要がある。効果的な情報収集・分析能力の獲得は、それに係る十分な動機付けと、指導者・専門家の知識と、学習者の知的好奇心のマッチングを必要とする。 今後、富山市ファミリーパークは、自然豊かな呉羽丘陵、里山を中心として地域と結びつき、環境 NPO・市民団体・自治振興会・学校等の多様な主体と協働し、持続可能な社会づくりを目指し、体験を通して里山の自然、歴史、生活文化を知ることの出来る事業を展開する等、ESD 取組の更なる発展が期待される。				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？				
五箇山合掌造り集落は、人里離れた山深い谷間の集落として、伝統的知識・技術が蓄積され、また、茅葺屋根の葺き替えは、「結」とよばれる相互扶助組織によって行われ、持続可能な土地利用より社会を構築してきた。今後、ESD の発展のためには、そのような日本の素晴らしい地域資源を、五箇山に暮らす地域住民、観光客、NPO や自治体など、全てのあらゆる人びとが認知できる教育・学習の促進が必要と考える。若者は、そのような場面で、学習者としての立場を担いながらも、次世代を担う立場として、主体的に持続可能な社会を構築していかなければならない。若者ならではの新しい視点、新鮮な態度で、ESD を享受するだけでなく、ESD の発展に寄与するため、積極的に日本国内、ひいては全国へESD 取組を発信していきたい。				

ふりがな氏名	ちば しもん 千葉 志門	都道府県	神奈川	
所属/肩書	特定非営利活動法人フリースペースたまりば			
私のESD活動	所属団体の一員として、遊びや食事を通して子ども・若者の暮らしを取り戻し、自己肯定感を育む活動			

活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）

私が一員として活動する特定非営利活動法人フリースペースたまりばは、「川崎市子ども夢パーク」とその中にある「フリースペースえん」の運営団体として活動している。

川崎市子ども夢パークでは、子どもの「やってみたい！」という気持ちを大切に、遊びを制限するような禁止事項を極力減らしている。土や水遊びはもちろん、たき火や工具・木材を使ったものづくりまで子どもたちは自由に遊ぶ。遊びやものづくりを通して自分の限界に挑戦できる。挑戦の過程で失敗し、自分の弱さを実感するが、失敗してもいいんだと見守る関わりの中でその弱さを受け入れることができる。挑戦を続けることで成功を経験し、「できた！」という達成感と自分も「やればできる」という自信を得る。子どもたちは遊びから多くのことを学び、自分で考え、判断することのできる力が養われていく。

また、同じ敷地内にあるフリースペースえんには不登校・ひきこもりの子ども・若者を中心に、日常的に30人から40人程度通ってくる。貧困や障がいなど様々な背景を持つ異年齢の人たちがまざりあい、スポーツをする者、楽器を演奏する者など各々が自由に過ごしている。毎日昼食をみんなでつくり、一緒に食べている。子どもたちが自ら耕した畑から収穫した野菜も食べる。「つくってくれた人ありがとう」の言葉が部屋に飛び交うと元気な「いただきます」が聞こえる。皆で食卓を囲み、ワイワイ食べることで「ひとりじゃない」ことを実感し、肩を寄せ合い隣の人と話しをしながら食べることで「つながり」を感じることができる。

安心して失敗できる環境でできなかったことを克服する経験や、「ありがとう」と他者から感謝されることを通して徐々に自尊感情が育まれる。ありのままの自分を受入れ、暮らしを取り戻して巣立った人の中には、子育てのために夢パークの近くに引っ越してきた例も見られる。

フリースペースたまりばはこうした活動を日々続けている。

・川崎市子ども夢パーク：<http://www.yumepark.net/>
・特定非営利活動法人フリースペースたまりば：<http://www.tamariba.org/>

今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？

今後のESD発展のためにわれわれが担うべき役割として、第一に、現在実践しているESDの活動を維持し続けることがあげられる。日々子ども・若者たちと接していて感じるのは、ESDを実践している実感はあるものの、一朝一夕に結果が得られるものではないということ。そのため、子ども・若者たちに寄り添い、暮らしを共にする現在の活動を根気強く続けていきたいと考えている。

第二に、所属している団体の一員として、日々のESD活動の実践を多種多様かつ多くの方々に伝え、現場における経験の共有を図ることがあげられる。子どもたちが様々な経験や関わりの中で失われた自尊感情を取り戻していく過程や、現場で聞こえる子どもたちの生の声、そしてそこに寄り添い続けるスタッフを含めた様々な人たちの考え方や様子を、ESDの考え方への知識や理解がまだない方々を含め様々な方々に伝え、共有し、知っていただくことがESDの発展に寄与するものと考えている。

ふりがな 氏 名	とば やすゆき 戸羽 康幸	都道府県	宮城	
所属/肩書	気仙沼市立階上中学校／教諭			
私の ESD活動	【防災学習】 テーマ：私たちは未来の防災戦士～『自助・共助・公助』の学びと『つながり』の大切さを通して～			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
所属校である階上中学校では、総合的な学習の時間を使い、ESDの視点を踏まえながら防災学習に取り組んでいる。東日本大震災以前から学習を始めており、災害発生時および発生後に、自分の身を守るために自分でできることや、地域の一員として、地域住民と協力してできることは何かを、「自助・共助・公助」の視点から考え、防災意識を家庭から地域へと波及できる防災リーダーを育成することを目標としている。また、1年ごとに視点を「自助」「共助」「公助」と設定し、中学校3年間で1つのサイクルで学習できるように取り組んできた。 震災の際、3年間防災教育を受け本校を卒業した高校生や帰省していた大学生が、中学生の指揮をとって活動した。避難所運営の組織ができあがった後もボランティア全体の動きの統率を任される者もあり、避難所の運営を積極的にサポートする者も多く見られた。 また、震災前から地域との合同訓練をしていた成果により、毎朝、各部署や地域の代表者で打合せを行い、避難所の運営や清掃、食事の準備などを組織的に取り組むことができた。 震災後は、まずは自分の命を守ることを最重視し、「自助」「自助を基盤にした共助」「自助を基盤にした公助」を1年ごとに学習する新たなサイクルで活動している。震災時の多大な被害、とくに人的被害を防ぐ、減らすためにも、勝手な『思い込み』をなくし、その時、その状況においてベストな判断ができる生徒の育成を目指している。 2012年12月7日17:18に大きな地震が発生し、津波警報が発表された際には、部活動に取り組んでいた生徒がそれまでに学んできた知識や訓練を基にし、率先して体育館の避難所開設に取り組み、200人を越える避難者を迎え、スムーズに対応することができた。				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？				
大人－大学生－高校生－中学生という年代を超えたつながり、また、市－学校－地域－ボランティア－NPO・NGOといった組織を超えたつながりが震災直後の生活を支えていた。これらのつながりを構築できたのは、防災教育の取り組みを、何年も継続してきたからこそであると考え。今後はESD（持続発展教育）をいかに持続していくかということと、そのために単調な活動にならずにその都度改善を加え、活動を発展させていけるかが大切であると考え。 そのために若者としては、これまで受け継がれてきた活動を継承することが不可欠であり、さらにインターネットをはじめとした便利なツールを利用し、広く普及させていく役割を担うことができると考える。同時に、私は教師という立場から、現代の若者から次の世代となる子供たちに対して、さらに社会を発展させていけるような人材へと成長させていくことが必要であると捉えている。				

ふりがな 氏 名	なかお ゆり	都道府県	大阪府	
	中尾 有里			
所属/肩書	NPO 法人箕面こどもの森学園／専任スタッフ			
私の ESD活動	市民を育む初等教育と大人の学びの場づくり			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
箕面こどもの森学園は「市民が創り、市民を育む」小学校であり、子どもが時間割を組み、計画を立て、実践し振り返ることで「自ら学ぶ」感覚を育む。特にテーマ学習とコミュニケーション学習について言及したい。 テーマ学習では「環境」「人権」「平和」「市民性」のカテゴリから細分化したテーマを掲げ、2 ヶ月程かけ全校生徒で探究型の学びを進める。生活とかけ離れた机上の学びではなく、本物に触れ体感し、自分がどう生きていくかを考える糧となる生活即教育を前提としている。 「環境教育」としては、地域のNPOの協力で菜の花を育て、菜種油を採取しながら循環型社会の意義について学ぶ「菜の花プロジェクト」や、再生可能エネルギーについての体験学習を行う「くらしとエネルギー」などに取り組む。「人権教育」では、「しょうがいって何？」というテーマで障害をもつ方々のお話を聞き、感じたことから障害とは何か議論を重ねる学習を行った。「平和教育」では、集大成として自分達で憲法を考え作り上げた「平和と憲法」、多様な国籍のゲストを招いて学んだ「世界の国を知ろう」などがある。 コミュニケーション学習では、「ことば共同」での対話学習や「全校集会」での会議運営・ルール決めに取り組む。これらの学習を重ねると、テーマ学習でも自律的に社会を考え、他者を認めながら取り組むことができるようになっていく。特に全校集会では多数決なしの話し合いで学校ルールを決めるので自分達の手で課題を解決することが染み付いていく。違う意見を受け止めながら自己を受け入れ、他者と折り合いを付けて改善する実践を重ねる。 また、大人の学びも両輪で進めている。2012 年 10 月より月に一度教育カフェ・マラソンというイベントで社会を熟議する場を設け、毎回中学生から大人が 30 名ほど参加している。ゲストを招き、毎回違ったテーマから対話する土壌と情報交換のコミュニティを創出している。				
・箕面こどもの森学園：http://homepage3.nifty.com/kodomonono-mori/ ・箕面こどもの森学園でのデキゴト：http://kodomonomori7676.blog22.fc2.com/				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？				
ESD 実践者に必要なことは継続的な情報収集、自らが社会を担う一員として責任を引き受け続けること、学び、発信して人々を巻き込むこと、次の世代の動向を知ることである。 私たち若者は、フットワークや WEB を生かして実践者同士でつながるための行動を起こし続ける必要がある。実践者同士の継続的な情報交換のため、データベースや SNS 上のコミュニティなどを作り、世界中の実績をいつでも閲覧し、相談しあえるような WEB 交流を呼びかけ運営することを担うことができる。また、様々な社会課題について敏感に情報収集し自ら学び続けるためにも、様々な世代の実践者に会い、ファシリテーターとしてその実践者から学ぶ場をオープンに提供することを担いたい。そして、大切なことは次の世代について常に知ろうとし、未来を担う人々のサポートをすることである。彼らが社会課題に取り組むには、自らが社会課題について行動し続け、ロールモデルとなることが求められる。				

ふりがな 氏 名	なかがわ まさき	都 道 府 県	東京都	
	中川 正樹			
所属/肩書	株式会社パソナ農援隊 コンサルティング事業部 ／マネージャー			
私の ESD活動	農業・まちづくり・地域活性化をキーワードに日 本農業の持続的発展を目的に人材育成を行って きました			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
1、鳥取県初の学生団体運営の農産物直売事業・アルバイト紹介事業を展開。				
【独創性】 中山間地域活性化を支援する団体を設立。その後、県外出身の学生を中心に鳥取県内の中山間地域・農業を キーワードに魅力の発掘・繋ぎ・発信を行ってきました。				
【革新性】 鳥取県初の学生団体が運営する農産物直売所をオープンし、農産物販売を行っている農業者先に学生ボラ ンティアや学生アルバイトを紹介し、農作業のサポートを実施いたしました。				
【成 果】 農産物直売所では毎週 1 回開催。学生ボランティア・学生アルバイトでは週 2 日／約 5 名の学生を紹介いた しました。また、中山間地域応援隊は平成 17 年から現在(平成 25 年)まで約 8 年間学生団体として存続し、 現在でも農産物直売所を実施し、鳥取県内の農業支援に努めています。				
2、消費者から農業従事者まで「食と農業」に関する教育事業の設立。				
【独創性】 「消費者」「就農希望者」「農業支援者」「農業従事者」の食と農業に関連する幅広い方々に対して体験型の研 修プログラム「アグリベンチャー大学校」の立案・運営を行いました。対象者を幅広くすることで、横の連携・ネ ットワークを構築しオールジャパンで日本農業を支えていける仕組み創り取り組んで参りました。				
【革新性】 幅広い対象者に対して、一つの教育機関として取組むのは国内初だと考えています。また、農業支援者向け の研修では、内閣府が実施する「食の 6 次産業化プロデューサー段位制度」の民間企業初となる教育機関と して認証していただき、日本農業の経営発展に繋がる 6 次産業化の支援体制の構築を行っております。				
【成 果】 2013 年より実施を開始し、消費者向け研修には延べ 30 名の方に参加していただき、安心安全な食と農に触 れ合っていただきました。また、10 月下旬開講の農業支援者向けの研修では、全国約 10 紙新聞等の取材、 40 名の参加者が受講していただく研修を実施しています。				
・中山間地域応援隊: http://www.pref.tottori.lg.jp/69236.htm				
・株式会社パソナ農援隊: http://www.pasona-nouentai.co.jp				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？				
ESD の発展のために、若者がどのような役割を担えるかについて、大きく2点だと考えます。				
1 点目:日本の地域資源を有効的にリノベーションする役割・・・ 良き日本の伝統・文化・環境等の地域資源をただ持続さ せていくだけではなく、これからの世代への発展させていく必要があると考えます。新たなイノベーションを考えるだけでは なく、現在の地域資源を発掘し、発展的・持続的・発信をする事がこれからの若者が担うべき役割だと考えます。				
2 点目:地域・業種を繋ぐプロデューサーとしての役割・・・ 地域や業種に囚われてきた思考や行動を取っ払い、地域・業 種を中間的に繋いでいき新たな産業・新たな雇用・新たな教育を創造する事のできるプロデューサーを担う必要があると 考えます。				
ESD の発展を若者として、新しいものを作るのではなく、今までの地域資源を有効的にマッチングを行いリノベーションし ていくことが役割だと考えます。				

ふりがな 氏 名	なかぎり ちか 中桐 千佳	都道府県	岡山県	
所属/肩書	岡山市立竹枝小学校／教諭			
私の ESD活動	「人・自然・未来とつなごう 竹枝っ子」の学校教育目標実現に向けて、児童と共に日々の実践をつみ重ねる			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
岡山市立竹枝小学校では、児童が、周りの人や社会・自然環境と関わりつながり、人間性を育むことができるように、学校と地域とが協働して「竹枝・ふるさと再生プロジェクト」等の ESD 活動に取り組んでいる。私も児童への指導や地域会議への参加を通して、このプロジェクトに取り組んでいる。 このプロジェクトは、児童が地域の人たちとともに学校田に米や野菜を栽培し、収穫したもので「フェスティバル*」を行ったり、「ふるさとづくり発表会」で、地域の歴史や自然環境の現状について調べたことをまとめ、「持続可能なふるさと」について地域の人たちに発表したりする活動である。これまでも、総合的な学習の時間等で、このような活動を実施してきたが、ユネスコスクールへの登録をきっかけとし、「ESD」をキーワードに、一つ一つの行事に目的意識を持って取り組むことにより、受身的な参加であった児童が、自分たちの意志で自主的・意欲的に参加する取組へと変容してきている。 このような、環境学習や食農体験に重点をおいた学校独自の活動を継続・発展させていくことで、身の回りの自然や生活の持続可能性に対する課題を追求し、地域に愛着を持ち、「持続可能なふるさとづくり」に積極的に関わろうとする児童を育成している。 *フェスティバル＝「竹小フェスティバル」（11 月下旬実施）年間を通して、様々な学校行事でお世話になった方々や地域の方などを招いて、今年の収穫を祝い、感謝の気持ちを表すために心尽くしのおもてなしをする会のこと。				
・岡山市立竹枝小学校：http://www.city-okayama.ed.jp/~takeedas/Takeeda_Elementary_School/Index.html ・岡山 ESD プロジェクト：http://www.city.okayama.jp/esd/top.html				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？				
これまで小学校の教員として、学校教育に関わってきたが、学校社会の中で過ごしていると、学校社会を違う視点から見ることの必要性を感じている。ESD の活動に取り組む実践者の若者とそれぞれの取組について発信しあい、アイデアを共有することにより、より広い視点から今の生活を見直す好機としたいと考えている。また、できるだけ多くの若者とのネットワークを構築し、世界規模で継続的に連携しあったり、ここで学んだことを岡山市や学校、児童へ還元し、より一層地域や様々な関係者と連携した ESD の活動を推進したりできると考える。				

ふりがな 氏 名	ながた ひろとし	都道府県	三重県	
	永田 裕寿			
所属/肩書	株式会社テクノ中部 環境調査部			
私の ESD活動	環境と教育			

活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）

私は、高校、大学、大学院と「環境」分野において様々な角度から学んできました。高校生の頃は、高校近くの里山での猿害についての調査をしました。猿と人の共生について、調査仲間、指導教諭、地元住民、行政や専門家等の意見を聞き、互いに協力をしました。それぞれの視点から問題に向き合う事の大切さと違いを学びました。

大学では、新潟県佐渡島でのトキの野生復帰に向けての取り組みについて、佐渡島に行き学びました。佐渡トキ保護センターで、トキの歴史や生態を学びました。また、地元住民の方々と協力をし、放鳥後のエサ場作りを行いました。佐渡島の植生や生態系について、現地には行かないとわからない事もあり、自分の目で見て体験するという大切さを学びました。

大学院では、三重県内で行える新しい環境政策の提案について国際展示会でポスター展示をしました。ポスターの前を通る方々に積極的に声をかけ、業種、年齢、国籍関係なく様々な意見を頂きました。他の展示や講演にも積極的に足を運び、異業種の新しい知識も得る事が出来ました。これら、高校、大学、大学院で、「様々な視点から見る」「現地に足を運ぶ」「積極的に動く」という3つの大切な事を学びました。

また、就職後は、中部地区で ESD 活動を行っている方々とコミュニケーションを積極的にとるようにしています。多くの人々と触れ合うことで、自分自身の視野を広げる事が少しずつでも広がっていきと考えています。年齢、職業等様々な人々と共に ESD 活動と一緒に行うことで、それぞれの立場からの意見や考えを聞くことができました。社会に出て気づいたこともありました。中部地区というローカルな枠ではありながらも、自分自身の知らない世界を知ることができました。その上で、中部地区ならではの独自性という強みも知ることができました。

そして、これら自分自身の経験を母校の高校生に ESD 活動の一環として伝え、広めています。

今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？

ESD の発展のために、若者が担える役割は、「積極性」です。年齢が若い事は、まだまだ時間があるという考え方ができます。自分自身が興味を持ったことに対して、体験し、学び、考えるという経験をより多くできると思います。より多くを経験することで、自分自身の糧にもなります。ただ経験をただでなく、次世代につなげる事も必要です。つなげる事で、次の世代、次の世代へとつなぎとめる事も可能です。その次の世代と経験豊富な年齢の上の世代との間に位置する私たち若者が間に入ることで、パイプ役ともなれます。その事で多くの方々と共に ESD 活動のより大きな推進も期待できると思います。そして、ESD の発展にもつながると思います。そのためにも、若者が積極的に ESD 活動を行うという重要な役割を担っていると思います。

ふりがな 氏 名		都道府県		
所属/肩書				
私の ESD活動				
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
非公開				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？				

ふりがな 氏 名	のむら かよ	都道府県	岐阜県	
	野村 佳世			
所属/肩書	養老町立高田中学校／教諭、 Go4BioDivメッセンジャー			
私の ESD活動	新しい仲間と出会い、素晴らしい考えを共有することで、私たちの地球の未来を素敵に創り上げる こと			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
「私たちの食べものはどこから？」の実践 生徒の大好きな和食や洋食の食材が、実際には日本産ではなく、外国からの輸入でなりたっていることを知るためのワークショップ。日本の食生活は主に海外により助けられている事を知ること、今後の食生活を見直して欲しいという目的で始めた。日頃よく目にする食品の広告から、食品がどこの国からやってきたのかを見つけ、食品を切り取り、地図帳に貼り付けていった。最後に地図を眺めてみると、多くの食品が日本へ輸入されていることを知った。このことから、日本人の生活は海外の食品や人々の労働力によって支えられていることを知ることができた。また、日本の裏側から届く食品のフードマイレージを計算して、食品が日本に届くまでの距離とCO2の多さを知り、生徒たちも驚いていた。日本に有り余るほどにある食品が地球の裏側の環境までも汚染していることを学び、生徒は、食品を大切に食べることと同時に地産地消活動の取り組みも考えることができた。 「“幸せ”な世界に！」の実践 人の“幸せ”の価値はいったいどこにあるのか。そんなテーマで、世界の家族と家族の所有物の写真から、“モノ”が多くある生活が幸せなのか、“家族や笑顔”のある生活が幸せなのかを考えた。一見、貧しく見える生活でもそこにはモノやカタチとしては表わせない“幸せ”があることに気づく。世界各国の生活の様子や文化を学ぶことができた。また、他国に関する偏見や人権を考え直すよい機会になった。国際理解にも繋がり、様々な国の生活をたった1枚の写真から見て、知ることができた。 「生物多様性～カラーを身近に～」の実践 白紙を外に持ち出し、カラフルな草花を紙に張り付けていく。いろいろな色で満タンにしたときに気づいたのは…。世界に存在する自然のものには、似た色や形はあっても、全くもっておなじ色や形が存在しない、少しずつ違っていることを発見した。				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？ 私は日頃から、ESD を創り上げるときに、日本の若者として、“世界の中の日本人”として何ができるかを考えた活動を取り入れたいと考えている。今回の国際会議では、世界の教育に劣らない日本の ESD の実践や研究を世界に発信したいと考えている。私たちがどんなことを問題として取り上げるのかによって、ESD の仕組み方も変わってくる。最も効率のよい“学び”は何か、一人で考えても答えはでないので、仲間と協力して創り上げる ESD を発信したい。 日本が抱えている環境問題や自然災害、外国人労働者、外国人生徒への教育など、日本ならではの課題点がある中で、どのように日本の若者が私たちの未来を、社会を変えようと頑張っているのかを世界にアピールするよいチャンスである。海外の ESD を研究し、ヒントを得た私の ESD に対する取り組みの実践をぜひ世界に発信し、世界中で“日本を知るための ESD”が行われることを願います。				

ふりがな 氏 名	はまぐち ゆうこ	都道府県	愛知県	
	浜口 祐子			
所属/肩書	インタープリターズ・ユニット 森あそび本舗／代表、NPO 法人 もりの学舎自然学校／理事、国立大学法人名古屋工業大学 コミュニティ創成教育研究センター／特任研究員			
私の ESD活動	環境教育プログラムの開発・実施、インタープリターの育成、工学によるコミュニティ支援のコーディネート			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
私は学生時代からこれまで、「体験から学ぶことで生きる力を育む」場をつくりたい、という思いから、キャンプカウンセラー、幼稚園教諭、インタープリター（自然案内人）、環境教育をベースとしたイベント・プログラムの企画実施、公共施設運営、工学と市民をつなぐコーディネーター等、様々な分野で活動してきた。現在の主な活動は下記の通り。 【体験型環境教育プログラムの開発・実施】 愛・地球博「森の自然学校」のインタープリターとして、自然観察以外の目的で訪れた来場者に対して、自然体感型環境教育プログラムを提供。その結果、参加者が身近な自然の中で新たな発見・感動を得るきっかけとなった。万博後は、その経験を活かして、主に都市公園など身近な自然をフィールドに、参加者自らが自然のおもしろさに気づくきっかけとなるプログラムを開発・実施している。近年は、行政・企業・NPO・大学等、多様な主体との協働で開発・実施するプログラムも増えている。 【インタープリターの育成】 愛知県が運営する環境学習施設「もりの学舎（まなびや）」の開館当初から現在まで、施設運営、インタープリターの育成等に携わっている。大学生や、社会人として働きながら、あるいは定年退職後に活動を始めた「市民インタープリター」を対象に、日々の活動での OJT や定期的な研修を実施している。その結果、インタープリター自身が参加者の気づきの場をつくる活動にやりがいを感じている。 【工学によるコミュニティ支援のコーディネート】 名古屋工業大学で研究している工学技術を、地域コミュニティの支援に役立てるため、研究者と行政・地域住民等との間をつなぐコーディネーターとして活動している。例えば、タブレット端末を使った高齢者の生活支援のシステム開発では、地域住民のニーズと研究者の持つシーズの接点を探り、調整を進めた。その結果、地域課題を住民自らが気づき、行動を起こすきっかけとなっている。				
・「もりの学舎」（あいち環境学習情報ライブラリー内）：http://www.aichi-kankyo-gakushu-plaza-unet.ocn.ne.jp/manabiya/ ・名古屋工業大学 コミュニティ創成教育研究センター：http://community.web.nitech.ac.jp/				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？				
ESD の更なる発展のためには、異分野間の相互理解とコミュニケーションが大切である。自分とは異なる考え方を受け入れた上で、自分の考えを伝え、それらを融合していくには、新しいものを受け入れる柔軟性を持った若者が重要な役割を果たすと考えている。また、若者がある活動にかかるエネルギーは、活動全体の推進力となり、周りの人・もの・ことを巻き込んで活動を広げる可能性を持っている。こういった若者の柔軟性とエネルギーを活かして、異分野間の人や活動をつなぐコーディネーターの役割を担うことができるのではないかと考えている。 次世代を担う存在である若者が核となることで、活動の継続性を高め、世代間を超えるつなぎ役として、ESD の発展に寄与できると考えている。				

ふりがな 氏 名	まえた りょうすけ	都 道 府 県	東京	
	前田 遼介			
所属/肩書	非営利団体 MET-next-／代表			
私の ESD活動	高校生のキャリア支援			

活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）

現代の若者は情報が多すぎて「これが自分に合った職業だ！」と簡単に思い込むことができません。学校では夢を広げる場はあるが、その夢を収斂させる場がない。教育において重要なのはその先にある夢や目標に向かって努力する過程です。だからこそ直接働いている人と会って、体験する。その中で「憧れ」を抱く場が必要だと思い、私は高校3年の10月に同い年のメンバー10名と「非営利団体 MET-next-」を立ち上げました。私たちは大学2年生以下（約50名）で、高校生を社屋に呼び、実際に社員さんと一緒に仕事を体験する「ゆめっと」という場を提供しています。過去には第1弾を読売新聞社様、第2弾をリクルート様、第3弾をサイバーエージェント様、第4弾を博報堂様と開催し計94名の高校生と約27名の社員様と一緒に開催させていただきました。大学生ではなく、高校生を対象に活動を行なっている理由は自分に合った大学選びをして欲しいという想いと、高校卒業後、就職や専門学校に進む約48%の生徒に対する支援が不足しているという現状があるからです。私は今後、この取り組みを学校や東京以外の地域に広めたいと考え、勢力的に活動しております。地方の高校生、地方の大学生、地方の企業とこの取り組みを行い「地域の人材は地域で育成する」といったような仕組みを作ることが「地方ゆめっと」の最終的な目的です。また、ゆめっと以外にも弊団体高校生支部メンバーとリクルートメディアテクノロジーラボ IT 女子部とでスマートフォンアプリ開発を行なったり、「夢と出会い、夢に向かって走る高校生インタビュー」を継続的にアップしたりする他、各分野のプロフェッショナルから高校生に向けて仕事の説明、激励メッセージ等をビデオで頂戴し、まとめたサイトの開設や、親が働いている姿をビデオで撮影し子どもにプレゼントする事業のリリースに向けて活動しております。

・非営利団体 MET-next-: <http://ryousukemaeta.wix.com/met-next->

・非営利団体 MET-next- Facebook: <http://p.tl/XxM1>

今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？

私が活動を行なう中で意識していることは「ビジネスにはならないけれども確実に価値があるもの」を埋めやすい環境にあるのは大学生か定年後の方であるということです。その中でも特に比較的、時間的な余裕があり、金銭的な余裕がある大学生は多くの社会的課題を解決することができるとても貴重な存在だと認識しております。また、諸問題に対して、大学時代から取り組むことは次世代を担う人材育成にも繋がります。様々な統計を見てもわかるように、近年の学生は社会貢献への参加意欲はかなりのもので、学生側にも社会の役に立ちたいとの意識があるといえます。そのような現状があるにも関わらず、学生が上手く機能できていないのは事業の立ち上げ方や経営のノウハウが分からないこと、そして引き継ぎ等の問題にあります。以上のような問題を解決し、学生が主体となって社会問題を解決できる仕組みを作ることができれば、ESDのあり方も大きく変化すると考えております。

ふりがな 氏 名	まつうら たかまさ	都 道 府 県	東京都	
	松浦 貴昌			
所属/肩書	NPO 法人ブラストビート／代表理事			
私の ESD活動	中・高・大学生に学校内外で、多様な社会人と共に学びあい、深い繋がりの中で「自分らしく生きる力」を育む			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
NPO 法人ブラストビートは、中・高・大学生と地域の多様な社会人とを繋げ、学びあいの中からお互いに成長しあい助けあう関係性を育む社会教育プログラムです。中学、高校の学内では、キャリア教育という文脈の中で社会人を講師として招き、ゲーム形式でイベント企画やポスターを制作、その中でチームワークや創造力、伝達力を磨き、「社会に出た後の自分らしさ」を考えてもらうきっかけの授業「イベプラ」を展開しています。（東京都教育庁「地域教育推進ネットワーク東京都協議会」推薦） また、学校外のプログラムとしては、「音楽×起業×社会貢献でチャレンジする 10 代を育てる」ということをミッションに、高校生や大学生などの若者を対象に社会教育プログラムを運営しています。大きくはステップが3つあり、1. 高校生・大学生が10人前後で模擬会社を設立し、（登記はしません）2. 予算ゼロから自力で音楽ビジネスプランをつくり、3. 音楽イベントを成功させ、収益の 25%以上を NPO・NGO などの社会貢献活動に寄付するというプログラムです。ユニークなポイントは、ブラストビートでは“先生”ではなく、“メンター”という制度で運営しています。過去のプログラム経験者である学生メンターと社会人メンターがチーム（5 人程度）となって、無償で高校生や若者達の会社を 3 ヶ月ほどサポートしていきます。メンターの動力源は“恩送り”とも言われる、自分が先輩や先人からもらった恩や学びを、次は自分が後輩や次の世代に送っていく、というものです。ですから、そういった善意の優しさが繋がっていけば、自然と広がり、活動も持続していくはずで、4 年前より始めましたこのプログラムも、2013 年現在で延べ 400 名の参加者、メンター数は 100 名となりました。また、地域も関東圏以外に、宮城（石巻）、福島、愛知（豊橋）、京都、大阪、石川（金沢）、福岡、沖縄と広がってきています。				
・NPO法人ブラストビート: http://www.blastbeat.jp/ ・中学生・高校生向けキャリア教育プログラム「イベプラ」: http://bb-career.jimdo.com/				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？				
ESD の更なる発展のためには、日本の若者達が利害のしがらみや固定化された考え、リスクなどが少ないことを自覚し、臆することなくスピード感を持って様々なチャレンジをすることが重要だと思っております。また、活動を一団体に留めず、団体やセクターの枠を超え、協働を率先して推し進めていくことも若者ならではの突破力が発揮されるのではないかと思います。そして、最終的には、日本の若者の ESD の実践が、世界のロールモデルになるべくその成果やプロセスを意識的に世界に発信していくことが大切だと考えます。日本には相互扶助の学びあい、助けあい、支えあう文化があります。その心に火を付けさえすれば、衣食住などの心配の少ない平和な時代に生まれた日本の若者だからこそ、競い合いや争いではなく、人の為、世界の為に貢献し、ESD の実践や世界との学びあいの連鎖を起こすポテンシャルがたくさんあると信じております。				

ふりがな 氏 名	みずの しょうた 水野 翔太	都道府県	愛知県	
所属/肩書	法政大学 1 年／名古屋わかもの会議代表			
私の ESD活動	環境、生物多様性、政治に関心があり、私たちが どう関心を持って行動に移すべきかを考え、取り 組んでいる			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
私は 2010 年名古屋市で開かれた COP10(生物多様性条約第 10 回締約国会議)にて当時最年少で実行委員会ボランティアや名古屋市ブース、なごや環境大学ブースの企画・運営を担当。その後、学生という視点で生物多様性や環境問題に取り組んでいくべきだと考え、生物多様性を扱った高校生団体としては全国で初めて、学生環境団体 NEO(Nagoya Environmental Organization)を 2011 年に創設。愛知県や環境省とともに生物多様性に関するイベントを開催。またカナダに本部を置く国連生物多様性条約事務局とパートナーシップ提携を結び、世界に視野を広げた。また、東日本大震災を機に地方のことは地方で決めようというコンセプトのもと「中部エネルギー市民会議」を結成。松原前名古屋市長や清水トヨタ自動車顧問、山本名古屋大学副総長をはじめとする方々とともに最年少で呼びかけ人を務めてきた。他にも、子どもの権利条約フォーラム IN あいちのユース実行委員などを務めた。2013 年より法政大学に進学をし、「僕らの一歩が日本を変える。」という 10 代の政治関心の拡大と 10 代の政治参画の促進を理念とする団体に所属し、高校生と政治家が社会問題を討論するイベントを国会にて開催。また、「模擬選挙」も実施してきた。今夏の参議院選挙に合わせて、未来の有権者に対して、あなたがもし選挙権を持っていたらどの政党に投票をするかという取り組みを YAHOO!JAPAN や模擬選挙推進ネットワークと共同で行い、全国を回り 1 万人から回答を得た。現在「僕らの一歩が日本を変える。」を脱退し、新たに地元名古屋で学生と政治家・有識者が日本の社会問題や東海地方が独自に抱える問題を討論できる「名古屋わかもの会議」を創設し、来年の 3 月 24 日に名古屋のシンボルタワー・テレビ塔で開催することが決定した。また、長野県小布施町で「地方から日本の未来を創造する」をコンセプトに全国の若者が討論する「小布施若者会議」の実行委員を務めている。				
・名古屋わかもの会議 Facebook: https://www.facebook.com/pages/名古屋わかもの会議/211646905684314 ・小布施若者会議: http://obuse-conference.jp/				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？				
ESD の更なる発展にはまず、ESD とはなにか日本で理解を深めることが重要だと感じている。ESD という単語を出しても開催地の名古屋、岡山でさえもそれほど認知されていないのが現状である。また年齢が下がればその傾向は顕著になっているだろう。ESD を発展させ、世界に発信していくためには、次の世代を担う若者たちが、積極的にアクションを起こしていくことが重要であるとともに、それが若者の強みでもあると感じている。自分と同じくらいの世代の人が ESD に取り組み、活躍しているのを見ると、自分も頑張らなくては、ESD ってなんだろうと考える人が少なからず出てくると思う。確かに一気に関心が増えることは考えにくい、その小さな、そして地道な積み重ねが重要であると感じている。私が考える若者の役割は、「若者が未来を考え、実際に行動に移し始めている」ということを周りの大人にアプローチすること。そして、同じ世代の人にもアプローチしていくことである。				

ふりがな 氏 名	みつい しゅんすけ	都道府県	
	三井 俊介		
所属/肩書	特定非営利活動法人 SET／理事長		
私の ESD活動	・ 現地滞在型ソーシャルイノベーション創出事業 ・ 雇用創出事業		
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）			
2011年3月11日に発生した東日本大震災、当時東京在住で大学3年生だった私は、3月13日に復興支援団体 SET を設立し、被災地支援活動を開始した。あるご縁から岩手県陸前高田市広田町に現地入りし、大学在学中も月に一度のペースで通い、ボランティア活動を行っていた。より深く活動を行う事を決心し、2012年3月に大学を卒業後、4月には単身陸前高田市へと移住した。現在では移住して1年半がたち、NPO 法人化し、さらなる事業展開を進めている。 現在は、外部から若者を呼び込み、現地で課題解決を行う「現地滞在型ソーシャルイノベーション創出事業」と、そのイノベーションをベースにして、現地で今まで無かった仕事を創っていく「雇用創出事業」の2本柱で動いている。 「現地滞在型ソーシャルイノベーション創出事業」では「Change Maker Program」を開発した。これは、外部者の若者と、地元の年配の方々が一緒に課題解決に向けて行動するプログラムだ。ビジネスコーチングプロセスを基本として、リーダーシップ開発プログラムを実施しており、参加者本人の成長と町への貢献を最大化させる。			
【実績・成果】			
2013年春に、関東圏の大学生7名を対象に実地した。 その結果、実際に参加者は視点や思考フレームが変わり、プログラム前は「目的（上流概念）から整理して、行動に結びつけていくことが難しかったが、プログラム終了後は、まず目的を定め、それを実行するためという思考法に変化した。 また、プログラム終了後の行動に明らかな変容がみられた。プログラム最終日には、広田町で報告会を行ったが、地元の方から「俺たちが変わらないといけないんだ。皆が変わっていく姿をみて、その勇気をもらえた。」と、言って頂いた。この実績を基に、本年8月より、1週間滞在型の「Study Program」に加え、3週間滞在型の「Summer Internship」も実行した。			
・ 特定非営利活動法人 SET: http://set-forjapan.jimdo.com/活動レポート/現地組活動レポート/change-maker-program/ ・ 浜野菜: http://www.hamayasai.com			
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？			
今後の社会を見据え、どのような人材が本当に必要とされてくるのかを考え、自身よりもさらに下の代へと伝えていくこと。 また若者である自分自身が常に変化を恐れずに、柔軟に対応していくこと。			

ふりがな 氏 名	もりた じゅんいち 森田 淳一	都道府県	愛知県	 防災共同学習での授業風景
所属/肩書	岡崎市立竜南中学校／教諭			
私の ESD活動	中学校における ESD 活動の研究実践 ～社会科と総合的な学習の時間を核として～			

活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）

ESD 研究を進めるようになった契機は、ESD 日米教員交流プログラムに参加したことでした。それまでも、中3の社会において公共バスの存廃問題から、地域社会の持続可能性を探る学習に取り組む活動や、総合学習において、「賛成？ 反対？ 臓器提供」と題して、ドナーファミリー・コーディネーター・移植患者の方に聞き取り調査を行いながら、医療制度の持続可能性を考える活動に取り組むなど研究を進めてきました。そして、このプログラムに参加して渡米した際に、アメリカの学校制度や環境学習を見聞することができました。ここで感じたことは、「ESD を広めることが、持続可能な社会を次の世代へ橋渡しすることへとつながる」ことです。また、国内でも仲間のネットワークができ、研究を ESD とつなげていきたいと考えるようになりました。

本校の特色ある学びとして、環境・防災学習と、社会科における ESD 教育があります。環境教育の分野では、岡崎市環境学習プログラムの編集委員として、カーボンフットプリントやバイオリージョンマップ等を活用した授業づくりに携わり、実践に取り組んでいます。このプログラムは現在、市内の全公立小中学校を挙げて取り組んでいる環境学習プログラムとなっています。

また、防災学習では、先述の交流プログラムで築いたネットワークを活用し、被災地を生徒とともに訪れて共同授業に取り組んだり、津波からの復興について追究活動を行ったりしています。これらの活動から、人と人、人と自然、人と社会のつながりが持続可能な社会づくりに欠かすことができないと考えるに至りました。まとめとして、防災フェスタを開催し、地域とのつながりを重視する視点を生徒が共有することができました。この活動から、現在、防災学習チャレンジプランに参加しています。本年度はさらに、社会科の学習において「裁判員制度」を教材化し、社会制度の持続可能性を考える学習にも取り組んでいます。

・岡崎市 環境学習プログラムについて: <http://www.city.okazaki.aichi.jp/700/740/742/p011690.html>

今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？

ESD の発展のために、果たすべき役割は、「つながり」の再構築だと考えています。

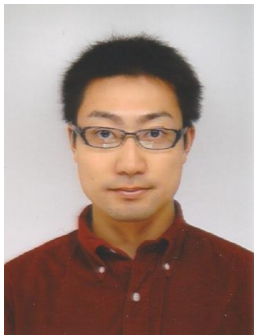
人間関係が希薄になり、隣人すら知らないという状況も生まれてきています。個人主義に陥り、社会の中で共に生きる一員であるという意識がなくなっている現状こそ、まさに持続不可能な社会だと考えています。若者が、地球の抱えている問題や現状を直視し、「自然」「社会」「人」「次世代」とのつながりを大切にする社会を再構築することができれば、人類社会は持続可能な社会へと近づいていくと考えています。

私の立場では、教育者として、子どもたちに、地域への愛着をもたせ、現状に対して正しい理解をするための手助けをすること。そして、ESD の学びの成果を、日本や世界の子どもたちや教育関係者と共有し合う水平的つながりと、企業や社会との垂直的つながりで共有していくことができるようにすることが、若者が果たすべき役割の一つだと考えます。

ふりがな 氏 名	やまもと ちひろ 山本 千尋	都 道 府 県	岩手県	
所属/肩書	岩手県立大学看護学部 2 年、岩手沿岸の中高生女子に援助物資を届ける会／代表、ガールスカウト岩手第 18 団所属、 ガールスカウト世界連盟 国際ガールズデー・アンバサダー			
私の ESD 活動	・ 岩手県沿岸部に住む中高生女子を対象に復興支援活動 ・ ガールスカウトのリーダーとして活動			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
東日本大震災の 3 日後、高校3年生だった私は友人に呼びかけ、「岩手沿岸の中高生女子に援助物資を届ける会」を立ち上げ、岩手県沿岸市町村に住む女子中高生、延べ 200 人以上に物資を直接届けた。現在は被災地域から進学した学生の支援を重点的に行い、共にふるさと岩手の復興に向けて歩んでいる。 また、小学校低学年からガールスカウト活動を行っており、現在はリーダーとして、幼稚園年長から高校生までの女の子を対象に能力開発や次世代のリーダーの育成を進めている。ガールスカウトは、少女と若い女性の可能性を最大限に伸ばし、責任ある世界市民となれるよう、世界 145 の国と地域で活動している社会教育運動である。 リーダーとして、地域、日本、世界が抱えている問題について理解を深め、自分達にできることは何かを考え、解決に向けて実践している。 2013 年 3 月には、ガールスカウト世界連盟主催のリーダーシップセミナーに日本代表として参加し、世界 24 ヶ国から集まった若いリーダーと、「環境にやさしい未来へ導く若い女性」をテーマに、自らがチェンジエージェントとして活動している。2013 年 9 月にはスリランカのガールガイドと共に、現地の中学生を対象としたリーダーシップセミナーを行った。 2013 年 10 月にはガールスカウト世界連盟、国際ガールズデー・アンバサダーに任命され、安倍晋三 内閣総理大臣と面会し、女性の地位向上のため「少女たちが創る、日本の未来」への宣言を行った。				
・岩手沿岸の中高生女子に援助物資を届ける会: http://www.ameblo.jp/stshena/ ・ガールスカウト世界連盟 国際ガールズデー: http://www.waggs.org/en/dayofthegirl/idgambassadors				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？				
持続可能な開発の教育(ESD)の発展に於いて最も重要なのは、一般市民の認知度を高めていくことである。 その手段として、ESD 活動を行っている若者たちのネットワークを構築することだと考える。それぞれの活動について SNS (Facebook、Twitter、Tumblr など) を用いた発信を行うことで、ESD 普及の一翼を担うことができると考える。 それと並行して、若者たちが現在行っている活動について活発な意見交換の場を設定し、お互いを磨ける環境を持つことによって、将来的には公開講座や小中学校での出前講座などで伝えていくこともできると思う。 ESD って何だろう？ どんな活動をしているのかな？ と興味を持っている人と活動をしている人とが出会えるプラットフォームのような役割を果たしていきたいと考える。				

ふりがな 氏 名	よこざわ さとみ	都 道 府 県	東京都	
	横沢 里美			
所属/肩書	公益財団法人 五井平和財団／地球っ子広場担当			
私の ESD活動	地球っ子広場 ～地球人としての素養（ESD マインド）の育成～			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
「地球っ子広場」は、五井平和財団の青少年平和教育事業の一つで、地域の子どもや大人たちが自由に集い、様々な体験活動を通して、共に学びあうための「子どもの居場所」です。和気あいあいとしたふれあいの中で、「地球理解」や「心と生命」などの体験的なプログラムを展開し、子どもたち一人ひとりが地球規模で物事を考え、平和創造の担い手となり、地球市民としての意識が育まれることを目指しています。現在、全国 27 カ所に教室があり、各地教室はボランティアにより運営され、手作りのアクティビティを用意しています。専門家ではない主婦や会社員、学生たちがESDに取り組んでいます。 地球っ子広場には、統一したカリキュラムはありませんが、一貫した「理念」と「行動規範」があり、当財団が提唱している「生命憲章」を活動の基本理念としています。「生命憲章」は、あらゆる生命が調和しあって生きていける平和なビジョンを示し、地球人としての意識やあり方を具体的に示しています。大人が子どもたちを見守るためにビジョンを共有することで、意識を合わせ一枚岩になることができます。また、行動規範として、「3つの約束」(①人にめいわくをかけない②自分のことは自分です③あまった力で、人の手助けをしよう)があります。武道には型があり、スポーツには基本フォームがあるように、この約束も、持続可能な社会を生きる地球人としての素養を身につけるための型のようなものです。価値観が多様化している中で地球人としての原点となり、個人と人類が同時に幸せになるための行動ができるようになると思っています。 <u>成果・実績</u> ● 2008 年には、文部科学省より「放課後活動支援モデル事業」を受託し、「子どもの自発性や創造性を高め持続発展教育(ESD)を推進する活動モデルづくり」に取り組みしました。 ● 2010 年 12 月には、ユネスコ本部より、国連が定めた「持続発展教育(ESD)の 10 年(2005～2014 年)」の公式活動に認定されました。 ・地球っ子広場: http://www.earth-kids.net/japanese/index.html ・ESD 優良事例集詳細: http://www.goipeace.or.jp/japanese/ho/2012/announce1209_01.html				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？				
特に 20 代、30 代は、ライフステージの中で、仕事、結婚、子育てなどを始め、特に将来につながる選択を迫られることに多く直面すると思います。その一人一人の選択が、自分の人生だけではなく、自身が思っているよりも大きく社会に影響を与え、世の中の潮流につながっているのではないかと感じています。日々繰り返される選択の中にある価値観が利己的なものか？利他的なものか？で周りに与える影響だけではなく、やがては自分の周りに起こることも大きく違ってくると思います。自分の人生を生きること、地球の未来に大きな影響を与える世代。専門家でもなく、一人一人が「自分事」として地球の未来に向き合うために、日常の中から大きな役割を果たしてゆける可能性があると思います。日常の中から平和を築き、持続可能な未来を創造するための価値観を大衆化してゆくことができるのではないのでしょうか。				

ふりがな 氏 名	よこじ ふみとし	都道府県	愛知県	
	横字 史年			
所属/肩書	新城ユースの会			
私の ESD活動	青少年が中心の活動に積極的に参加し、国際・地域社会に貢献できる方法を模索している			
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）				
「日本および東南アジア各地の青年との交流事業」 内閣府「アジア青年の家（ASIAN YOUTH EXCHANGE PROGRAM IN OKINAWA 2010）」等、多くの国際交流事業に参加し、英語を通じて社会問題について意見をかわすことで、将来各自が国際社会にどう貢献できるか考えている。それを英語スピーチコンテスト等で発表することで紹介し、同年代の意欲のある仲間を増やすとともに、英語・日本語でのコミュニケーション能力の向上をはかっている。 「地域社会貢献」 「新城ユースの会」を中心に、世界各地の青年による来たるべき「世界ニューキャッスル会議」に向けての準備や成果報告のために、ボランティア活動をしている。市内の各組織と連携し、地域の活性化と「ツールド新城」「世界オリエンテーリング選手権」等行事の運営・補佐をすることで、英語力と経験をつんでいる。				
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？ メディアを利用した、ESD 活動の ① 理解を得る（例：各団体で目を引くような発表） ② 仲間を増やす（例：仕事を細分化。気軽に参加できる体制の構築） ③ 具体的な活動（例：行政・各団体の協力による地方行事の運営） の三本柱による持続。				

ふりがな 氏 名	よこた はじめ	都 道 府 県	
	横田 創		
所属/肩書	公益社団法人 日本ユネスコ協会連盟／理事		
私の ESD活動	民間ユネスコ活動を中心とした地域と世界がつ ながる学び合いの場づくり		
活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）			
ヨハネスブルク・サミット提言フォーラム地域セミナーを松山に招致（2002 年 7 月、唯一の学生主体による地域セミナー）し、ESD の取り組みを始めた。以来、主として民間ユネスコ活動の中で国内における ESD の取り組みを実践している。 例えば、2005 年度ユネスコ・ユースセミナーにおいては「今、私たちにできるユネスコ活動とは？ーきっかけは ESDー」と題して、全国から集まった青年リーダーに対する ESD の普及に取り組んだ。企画責任者として関わったこの事業では、既存のユネスコ活動と ESD の関係を整理し、参加者が地域に持ち帰って実践できるワークショップを体験してもらい、学校等で活用できる授業案の形で整理して提示した。これを契機に地域のユネスコ協会等の青年活動の中では一定程度 ESD が取り入れられた。 また日常的にユネスコスクールを含む学校等や生涯学習センターと連携し、出前授業などを通して様々な ESD 的な学びの場づくりを実践している。愛媛大学環境 ESD 指導者養成講座には 2009 年度から外部講師等として関わり、棚田の残る東温市の里山における 1 年間を通したお米づくりに関わるフィールドワークなどを実施した。また同大学等でつくる「日本・インドネシアの農山漁村で展開する 6 大学協働サービスラーニング・プログラム」におけるフィールドワークの受け入れ等も同地域で実施し、日本人学生だけでなく、インドネシア、アメリカ、フランスなどの学生も参加して「都市と農村の関係から持続可能性を考える」というテーマのプログラムを行い、地域に根付く ESD 活動を地域から世界に発信するとともに、地域と世界が双方向につながり学び合う場づくりを試みた。 国外では、東ティモール民主共和国の農村において住民主体の CLC（コミュニティ・ラーニング・センター）の設立・運営に協力し、プログラム中に ESD 的な視点を組み込む重要性を提言している。			
・ユネスコ・ユースセミナー紹介：http://www.mext.go.jp/unesco/008/002.htm ・愛媛大学 SUIJI サービスラーニング・プログラム： http://www.ehime-u.ac.jp/english//information/about/publicity/newsletter/detail.html?new_rec=10618			
今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？			
ESD の具体的な実践は、持続可能な地域づくりと結びつくことで大きな効果を上げると考える。地域づくりに関わる若者が増え、そうした若者が ESD 的な視点を持って地域づくりに取り組むことが重要ではないか。まず、若者が地域の人々の話を聞き、主体的に建設的な議論に加わっていく姿勢を見せることは、学び合うという姿勢を地域の中で醸成する。また、若者の主体的な参加が、未来志向の取り組みを生み出す。そして、「任せて文句垂れる社会」から「引き受けて考える社会」へ、自立した地域へと人々を動かす原動力になりうるのではないか。そうして持続可能な地域への学び合いが有機的につながった時、初めて全体として持続可能な地球社会への道筋が見えてくると考える。			

